
黒翼 ～ 精霊の物語 ～

神月きのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒翼　　～精霊の物語～

【Nコード】

N0130B

【作者名】

神月きのこ

【あらすじ】

昔、精霊がいた時代。魔術師が世界を支配していた時代。精霊と魔術師は契約を結んでいた。魔術師は精霊に力を分け与え、実体化させる。精霊は魔術師を主人とし仕える。ここに、異端の黒き翼であるがゆえか、それともその力の強さからか。主人を見つけられずにいた精霊がいた。一方、強い魔力を持ちながらも、それを外に出す術を持たない少年がいた。異端の精霊と異端の魔術師。彼らが出会ったときから、運命の歯車が回り始める。

序章 黒い鳥

大地を巡る風のある限り

私はここに留まりましょう

あなたの風のある限り

あなたの残した命のある限り

いつか私が消えるまで

明るい日差しが降り注ぐ中、柔らかな白髪を揺らす少年はその歩みを止めた。

今までのんびりと辺りを見渡していた彼の目は、今は一箇所に留められている。

広く枝を伸ばし、濃い緑の葉を纏った、その隙間から零れ出る光。それを遮るのは。

逆光だから、というだけではない。紛れもない漆黒の鳥が静かに佇んでいた。

カラスよりも大きいその黒い翼の持ち主は、同じように黒く光る瞳を少年へと向けた。

目が合うと少年は、ゆっくりと丁度その鳥の真下へと歩き、再び視線を合わせてふ、と微笑んだ。

「誰か、待ってるの？」

何冊も抱え込んだ本をしっかりと抱きながら問いかける。

「いつもそこに座ってるよね？ 学校に、君の主人がいるからかな？」

ゆったりとした問いかけは、心地よく風に乗って流れていく。

鳥の長く垂れ下がった尾羽が揺れた。

「俺が……見えてる？」

空気を震わせることなく、直に脳に届く音は高くも低くもなく、そして水の流れのように澄み切っていた。

ああ成程、と。

納得すると同時に、驚きと喜びと。そして様々な思いから少年の

口元の笑みが深くなる。

権利が与えられたのだ。彼にも。

一生訪れることなどないだろうと思っていたチャンスが巡ってきたことを理解した。それで十分であった。

例えこの機会をものにすることができなくても、彼は幸せであった。

「うん、見えてるよ。黒くて……綺麗な羽が。声も聞こえてる」
だけれど叶うならば。

強く深い、切ることのできない絆を。

そう願って、少年は手を伸ばす。

その選択が己を激動に誘い込むことも知らずに。

暑い日差しすらも吸収する翼のはためきは
静かに伝説の始まりを告げる。

序章 黒い鳥（後書き）

連載を始めさせていただきます。

拙い作品ですが、これからよろしく願います。

1話 帰還

日は既に傾き、街道を赤く染め上げている。

徐々に暗くなる天頂が織り成すグラデーションを見上げる青年がいる。

辺りには青年が乗る騎馬の蹄の音だけが響いていた。

フードを目深に被った青年の顔は、傍から見ることは敵わない。

纏うローブは乾いた風の巻き上げる砂塵で薄汚れていた。

視線を前に戻した青年の瞳に、明るい灯が映る。王都に辿りついたのだ。

その灯はまだ小さな点の集合にしか見えないが、長時間馬上で過ごしてきた青年はホツとしたように息をついた。

「ようやく見えてきたね、レン」

肩に留まる鳥に話しかける声は、優しい響きを帯びている。

騎馬の歩みを緩めることなく、黒い鳥の頭をそつと撫でる。

「久しぶりの王都だ」

カチリ、と腰にさされた剣が音を立てた。ローブの布を押し上げるその剣は、青年の長身に釣り合って長い。

灯が近付いてくると同時に見えなくなる。高い城壁に遮られ、外の者を拒絶する。

冷たい隔たり。王都へ帰るたびに青年はこの冷たさに身を震わせている。

肩の鳥が、気遣うように頬を摺り寄せてきた。

その際に、青年のフードからは白髪がチラリと覗く。

「大丈夫だよ、今日はもう遅い。……爺さんのうちでゆっくり休もう」

城壁をくぐれば、そこはもう彼らを迎えてくれる場所に他ならないのだから。

一頭と一羽と、そして一人。

彼らは共に、王都・セラフィムに入城を果たした。

それはまだ、この地に精霊と人が共存していた時代。
魔術師が支配する国があった。

魔法国家・アナト帝国。

建国から480年、魔術師以外が皇帝になったことはない。
城からは徐々に魔力のない者が消え、有能な魔術師だけが権力を
持つようになった。

精霊と契約ができるような魔術師だけが。

“魔術師は精霊に魔力を与える。

代わりに精霊は魔術師を主人とし力を尽くす”

単純な契約だが、これがなかなか難しい。

契約をしていない精霊は実体化することができないからだ。
つまり、通常は人に目視されることがない。

視認できるか否かは相性による。

それはきつと、天が引き合わせようと選んだということ。
ただ一人の主人、運命の引き合わせ。

「いつ、ちょっと待……っ、そんな、乱暴にしたら痛……！」
郊外に位置する一軒の家。

頑丈なレンガ造りのそこから、悲鳴のような声が響き渡る。

すっかり日が暮れているが、この辺りには他に民家もない。近所迷惑にならないということが救いだっただ。

「もつと、優しく……っ」

「じゃああしい！ 男がこんくらいでビービー喚くでないわ！」

ウォルトの懇願を、怒声がさえぎる。

今ウォルトは上半身を剥き出しにし、深く傷の刻まれた右腕の治療をもらっていた。

他所を向いて、白い前髪を掴んで痛みを耐える。

「大体にして、適当な処置しかしらんから今泣きを見るんじやろうが」

この傷は遠征先の戦で負ったものだった。

今から一週間ほど前のことである。

ぞんざいに包帯を巻きつけただけで十分と思っていたのだが、時間が経つにつれどうにも痛みが増し、動きが鈍くなってきた。

確認してみれば案の定、化膿していたのである。

仕上げ、とばかりにガイは消毒液を染み込ませた脱脂綿を傷に押し付けた。

「いつ、だあああ！」

「お前がそんな声をあげるから、見てみる。黒翼が怯えとるじやろうが」

真新しい包帯を手についたガイが指し示す方を、空色の瞳が追う。そこで見たのは、黒い瞳を涙で一杯にしてこちらの様子を窺っているレンの姿だった。

今は人の姿を取っているその精霊、柱の影でぶるぶる震えている。「ごめん、レン。もう大丈夫だから、こっちおいで？」

引き攣った微笑を浮かべながら、レンを手招きで呼ぶ。右手は包帯を巻いている最中なので左手である。

呼ばれた当の精霊はというと、おっかなびっくり、といった様子ではあるが床を擦るようにして足を運び、主人の隣に座り込んだ。

座ると腰の下まである黒髪が床の上に波打った。

「ウォルト、もう大丈夫……？」

心配そうに見上げてくる瞳は、幼い子どものそれによく似ている。大人の外見に子どもの瞳、違和感はあるがウォルトももう慣れている。

幼き日に契約してから、既に10年もの歳月が経過しているのだから。

「うん、平気だ、……っだあ！」

未だ治療の最中であつた腕を包帯で力いっぱい締め付けられると、再び悲鳴があがる。

レンが面白いくらいに勢いよく背すじを伸ばしたことで、思いの外大きな声を出してしまったことに気付いた。

「……」

気まずい。

平気だと言つた先から悲鳴をあげてどうするのか。

零れないのが不思議なほどに瞳に涙を溜めた精霊を宥めるべく、怪我をしていない側の手でそつと頭を撫でてやる。

「大丈夫だつて。これくらい大した怪我じゃないから」

「その割にはでっかい泣き声をあげとつたがな」

老人が茶々を入れる。

「そーそー。ほら、俺はなんでも大袈裟っていうか……って悪かつたな！」

最後の怒鳴り声は、でっかい泣き声にかかるのか、大袈裟にかかるのか。レンには判別がつかなかったが、恐らく両方なのだろう。

クスクスと声をあげて笑い出したレンを見て、ウォルトはホッと息をついた。

きつと、年下の兄弟をあやす時というのはこんな感じなのだろう。

「さて、そろそろ夕飯にするとしようかの」

常に気難しげに眉間にしわを寄せているガイの表情が、いくらか微笑ましそくに柔らかくなっている。

救急箱を持ってよっころしょ、と立ち上がった。

「早く飯に食って早く寝ろ。明日は報告に行くんじやろ」

救急箱を元の位置にしまうと、ガイは腰に両手を当てて伸びをした。

夕飯時になって突然帰ってきた2人の夕食も、既にダイニングには用意されている。

「はい」

「いや、俺は久々だし研究室の方……」

素直な返事をしたのはレン。

ウォルトはというと、ささやかながら抵抗の言葉を口にしかけ、

「いいから寝ろ」

という2人からの命令に沈黙せざるを得なくなったのだった。

1話 帰還（後書き）

世界の説明が難しいですね…。

2話 兵舎

翌日、太陽が真上に昇る頃になってからウォルトとレンは家を出た。

向かう先は王都の中心地、国の最重要施設　つまりは、城である。

ウォルトはボロボロのローブをマントのようになびかせ、レンは人型で背には翼を残したままふわふわと浮いている。

血の染み込んだローブと皮のホルダーの吊り下げられた使い古された長剣が一振り。決して正装とは言えないどころか、不審人物と思われるも仕方がない装いの剣士は、しかし誰に咎められることなく城門を通過する。

門をくぐった2人は、そのまま建物には入らずに裏へと回った。

四季折々の木々が並ぶ裏庭。今は城壁に巻きついたツタやブナの木が紅や黄に色づき始めている。

裏庭を通り過ぎると、背の高い樹木に囲まれた建物が見えてくる。並んで二軒建てられているそれは宿舎なのだが、一軒は細かく手が加えられて見るだけでも美しい。

だが、もう一軒。そちらは古びた木造建築、見ようによつては味があると言えなくもないが、今にも崩れそうな程に老朽化が進んでいた。

ウォルトは、その古い宿舎、広いだけ取り得の兵舎の前で歩みを止めた。

「先生！」

扉の前で、大声を張り上げる。

「先生ー、ウォルト・ラヴェール、ただいま帰還いたしました！」
叩くたびにパラパラと木屑がこぼれる扉を何度もノックしている

が、一向に人の出てくる気配がない。

いないのかな、とレンと2人顔を見合わせる。

「せーんせーっ！ 可愛い弟子が、嫁さん連れて生還しましたよー！」

言い終わるか終わらないかのうちに、ドドドドッという激しい足音、そして勢いよく飛び出してきたのは金色に光る影。

「貴様あー！ 任務の最中に女を口説くとは何事かー！！！」

「ぐえっ！」

見事な飛び蹴りがウォルトの首筋に決まった。

骨が鈍い音を響かせ、ウォルトは地に倒れこむ。

「んあ？ なんだ、黒翼かあ」

完璧なまでの殺人キックを決めた女は、レンの姿を見るとなあんだ、と呟いた。

やれやれ、と女は肩に手を置いて首を鳴らす。

「……っ、ウ、ウォルト！ ウォルトー！！！」

突然目の前で繰り広げられた出来事に、絶句し立ち尽くしていたレンだが、我に返ると叫び声をあげた。

倒れたウォルトの傍に膝をついて、泣きながらピクリとも動かない彼を揺さぶる。

「まったく情けない……。嫁の一人や2人、現地でゲットできんのか」「せ、せんせ……さつきと言ってること、ちが……」

少し回復した様子のウォルトがなんとか顔を上げ、抗議の言葉を口にする。

だが、その様子を見て女は鼻で笑った。

「細かい男だな。そんなだからいい年して女の影一つないんだ」

「理不尽だ……」

涙目でやり取りを見守るレンが呟いたが、女の一睨みで口をつぐむ。

背の高い女だ。スラリと伸びた手足は引き締まった体と相まって一層力強く見える。

特別に美しいわけではない。だが、健康的にしなやかなシルエツトが彼女の魅力を引き立てていた。

「まあ、本当に黒翼を嫁に迎えるつもりなら女などいなくても構わんがな」

年の頃は30前後であろう。だが、快活に笑う表情には少年のようなあどけなさが残っている。

「リオン先生」

今、レンに向けられている彼女の目は穏やかで優しい。

どこか拗ねた様子で、レンは彼女の名を呼んだ。

「俺は嫁にはなれないよ。男性体だもん」

精霊は概ね中世的、もしくは女性的な外見をしている。

レンも例外ではなく、丸みを帯びた輪郭、大きな漆黒の瞳を縁取る長い睫毛は美少女といった風情である。しかし、ひよろひよろと細長い身体には女性特有の柔らかさは一切見受けられない。

「うちの兵舎には男でもいいってのが複数名いるがな」

軽く息をついて、リオンは背後の兵舎を振り返った。

半端に開け放してあった扉から、こちらを覗いている兵士が4、5人そこにはいた。

「やほーレンちゃん、久しぶりー」

「相変わらず可愛いね〜」

隙間から手を振ってくる様はかなりむさ苦しい。

既に見つかっているのだから出てくればいいものを、何故か狭い隙間に押し詰めになっている。

レンはきょとん、と目を瞬かせるがすぐににこにこ笑って手を振り返した。

「……アイドル化してるね、レン」

ようやく復活したウォルトだが、いまだにガツクリと肩は落とし

たままである。

「ほらほら、お前たち。見回りの時間だろう」

パンパン、とリオンが手を打つと兵士たちは慌てて外へと走っていった。

暫し残る足音が聞こえなくなるまで、3人は彼らを見送っていた。

「さて、と。ウォルト。無事だったようで何よりだ」

「つい先ほど無事じゃなくなりましたが」

「うるさい黙れ」

何だかんだ言いながらもウォルトのことは本気で心配していたリオンである。

軽口（というにはいささか暴力的だが）を叩きながらも、ウォルトを見る瞳には弟子に対する慈愛が溢れている。

「先ほど陛下の下にも報告が届いた。じきに帰ってくる頃だろうとは思っていたんだ」

どうりで、とウォルトはリオンの姿を見て納得した。

ウォルトは先日まで軍の依頼で内乱の平定に向かっていた。戦況が落ち着いたため帰還したのだが、そのことを報告するにはリオンを通さなければならない。

そして、今。ウォルトが今日来ることを予想していたリオンは既に正装に着替えている。

「リオン先生、もしかして今着替えてる途中だった？」

それならば、最初の呼びかけで出てこなかったことにも納得が行く。

「ああ、訓練が終わってから風呂に入ったりもしていたからな。…さあ、そろそろ陛下のところへ行くぞ」

話を打ち切り、一度リオンは宿舎の中へと入っていく。戻ってきた時には真紅のマントが追加されていた。

「じゃあ行きますか。レン、いい子で待ってるよー？」

「……はい」

レンは国王の御前に出ることはできない。付いていったところで謁見の間の結界に弾き出されてしまう。

承知してはいても、それでも不満が残る返事を聞いて、ウォルトは思わず笑い声を洩らした。

3話 謁見

「先の遠征ではご苦勞であつたな。そなたの働きの度も不届き者どもを退けることができた」

謁見の間、扉から続く紅の絨毯は一直線に玉座へと伸びている。

玉座に座るのは当代の皇帝、アザゼル7世。

扉から玉座の間、扉から近い側にウォルト、玉座の正面にはリオンが頭を垂れて跪いている。

周りを見ずとも両側の壁に並び立つ近衛たちの視線は痛いほどに感じていた。

無関心、悪意、軽蔑、興味 隠されることなく空間に満ちた感情は、いつまでも慣れることなくウォルトの心を苛み続ける。

「勿体無いお言葉にございます」

かけられた言葉はウォルトに対するものだが、応じたのはリオンであつた。

「歸つてきて早々にすまぬが、西方の軍が苦戦しておるようだ。：

…行つてくれるな？」

（すまないなどと、思つてもないことを……）

心の中で毒づいたのは師弟のどちらであつたのだろう。

ウォルトは官職を持っていない。

3代前から続く名家の出身でありながら、生まれ持った能力により異端視されている。こうして城お抱えの傭兵として仕事をこなすのも、便利屋としていいように扱われているだけだ。

こうして、報告のたびにリオンを伴い、国王と直接言葉を交わすこともできないのがいい証拠ではないか。

「僭越ながら申し上げます」

内心で溜息をついていたところ耳に入つたリオンの声に、ウォル

トはギョツとして顔を上げた。

「ウォルト卿は此度の遠征にて腕を負傷した様子。これではまともに剣など……」

「シャマイン様！」

リオンを制すウォルトの声は、小声ながらも鋭く響いた。言葉を留めて、リオンは唇を噛む。拳を強く握りすぎて指は白くなっていた。

「……出すぎたことを申しました。どうかお許しを」
悔しさを押し込めて絞り出される声。それは雄弁に感情を表している。

「もうよい。今までの手柄に免じて不問にしてやろう」

「は、有難く存じます」

「もうさがれ。明日には現地に向かってもらうゆえ、支度をしておけ」

それは手で払う仕草がなかったのが不思議に思えるほど、ぞんざいな口調だった。

下がれ、というのをいつまでも残る理由もない。

リオン・シャマインとウォルト・ラヴェール。師弟は揃って頭を垂れ、御前を退出したのであった。

彼らが出て行き低く扉の閉まる音が響くと、余所行きめいて張り詰めた空気が幾分和らいだ。

「ふん。他の者として怪我などいくらでもしておるわ」

皇帝の瞳に冷たい光が宿る。

いや、先ほどからその光は確かにあったのだ。ただ、表面をいくらか取り繕っていただけのこと。

「恨むなら、あのような身体に生んだ親を恨むがいい」

アザゼルの声は嫌悪に満ちている。彼にとって、魔法を使えない

者など価値がないに等しい。

「陛下。お耳に入りたいことが」

玉座の後ろから、アザゼルに話しかける者があつた。名をハーデス、皇帝の側近を務める男だ。

「ウォルト・ラヴェールの精霊のことです」

「精霊？ ああ、あの異端か」

異端者同士、似合いだわい、と皇帝は低く笑つた。

「そうです。白き翼の一族でありながら、その姿は……」

そこで一度、ハーデスは口を閉ざした。

白髪の傭兵が連れている精霊のことは、この場にいる者なら誰もが知っている。

敢えて言うまでもなく、皆がその姿を思い浮かべる。

黒い翼、黒い髪、黒い瞳。

自然界で生まれるはずの精霊が、自然に反している。そのなんと穢れたことか。

「あれは危険です。……恐ろしい力を持っている」

重々しく告げられた言葉を、アザゼルは笑い飛ばした。

「アレの力が強大であることなどわかつておる。しかし、主人がウォルト・ラヴェールでなければの話だ」

「ええ、仮にラヴェール家の嫡男が反乱を起こしたところで、本来なら何も恐れる必要はありません」

アザゼルの嘲笑のことは肯定する。

「反乱分子に人間と精霊が一人ずつ加わるだけならば、今と変わりますまい」

大したことがない、と殊更に強調するハーデスの口調に何か見過ごせないものを感じて、アザゼルは眉を寄せた。

「話してみよ。お前が危惧する理由を……」

3話 謁見（後書き）

今回は少し短めです。

視点が安定できておらずすみません。

4話 師弟

謁見の間から退出し、兵舎に戻る廊下に憤りを隠そうともしない足音が響く。

「まったく、何考えてるんですか。陛下にあんなこと言つて！」

「あー、うるさいうるさーいっ」

大理石の床にブーツの音を大きく響かせるウォルトが怒りを露にしても、リオンはわずらわしそうに耳を塞ぐだけである。

早足に歩く廊下の内装などを見ている心の余裕はなかったが、幾度となく歩いた場所なだけに確認しなくても通る場所は分かった。た。

「下手に陛下の逆鱗にでも触れたら大変なことになってましたよ？」

静かな口調だが、逆に真剣な苛立ちが際立つ。ウォルトは腰を屈めてリオンと真っ直ぐ目を合わせた。

だがリオンはさっさと扉を押し開いて外に出てしまう。

この扉は裏庭に出るためのものだが、芸術家がデザインした杖の紋章が大きく浮き彫りにされていて高級なつくりになっている。

重みのあるその扉が閉まると、リオンは空を見上げた。

先ほどまでであった青空に、今はうつすら雲がかかっている。

「それでもな。言つてやりたかったんだよ、一度。玉座にふんぞり返っているだけの、あの男にな」

視線はウォルトには向いていない。だが、真っ直ぐ空を見据える瞳には、確かに研ぎ澄まされた刃がきらめいている。

ゾクリと、背すじに冷たいものを感じてウォルトは身を震わせた。

「……それで殺されたら、何の意味もないじゃないですか」

「そんなことはないさ」

すっかり勢いがさがれてしまった様子のウォルトの方を向いて、リオンはにこりと笑った。既に刃は鞘に収められている。

「月並みなことを言うが、私が死んだ後には何かが残る。無意味な

ものなど、何も無いのだよ」

後半はまるでどこかの偉い学者を真似したような、おどけた口調だった。

リオンが歩き出したので、ウォルトもそれに続いた。

「私は今、こうしてお前と話しているな。兵舎には私を隊長と慕ってくれる部下たちがいるし、家には旦那も息子もいるわけだ。私が生きているのと死んでいるのとで、多かれ少なかれ差異があるとは思わないか？」

落ち葉を踏む音が、言葉の最後に重なった。

「それは……そうかもしれないですけど」

「釈然としない顔をしているな」

言い募る言葉を搜して、だけれど見つからない。そんなもどかしさに眉を寄せるウォルトを、リオンは慈愛の眼差しで見つめる。その眼差しに、ウォルトは母親を見た。

「今はそれでいいさ。いずれ、お前にも分かるときが来る」

リオンはウォルトの肩を軽く叩いた。この話はもう終わりだ、と言つかのように。

だが、ウォルトはリオンの台詞に引っかけりを覚えた。

「それはどういう……」

「あ、ウォルトー、リオン先生ー」

間の抜けた声に遮られ、詰問は不発に終わる。

気がつかないうちに、兵舎が見えていた。

忠犬よろしく玄関の前でじっと待っていたレンがこちらに向かって大きく手を振っている。

段差の部分に座り込んでいるレンは、いつもならすぐ駆け寄ってくるのだが、今日は座ったままだった。

まさか、とウォルトは眉を吊り上げる。

目を凝らせば、レンの白い装束の上に広がる鮮やかな色。

それを認めてレンに駆け寄った。

「レン、これは何かな？」

ウォルトからの問いかけに、レンは気まずそうにえへ、と笑った。
「お菓子」

「見ればわかるよ、それは……」
ガックリとウォルトは脱力する。

レンの装束の上に広がっていた色。それは、色とりどりの包み紙。殆んどが飴玉のようだが、ビスケットやチョコレートらしき包みもある。

思わずしゃがみ込んでしまったウォルトの横に、追いついたリオンが立つ。

「おー大量だな、また……。誰にもらったんだ？」

レンの膝の上に乗る菓子の数々を見たりオンも、呆れたように口を開いた。

「ここの兵舎のお兄さんとお姉さん」

首を傾げつつ、背後の宿舎を指差すレンの表情は、何故呆れられているのか理解できていない様子だ。

レンの返答に、リオンはやっぱり、と遠い目をしながら兵舎を見上げた。どうにもここの兵士たちはレンに構いたがりすぎる。

「人から簡単にお菓子とかもらっちゃダメって言ってるだろー？」
今更何故こんなことを、とウォルトは頂垂れる。

これではまるで、幼い子どもに言い聞かせる母親ではないか。

その上、この子どもは素直だが時々言いつけを忘れる。特別頭が悪いということはないはずだが。

「いらないうって言ったのに無理矢理くれちゃったんだもん」

ふくれっ面をするのは、叱られて拗ねてしまったのか。余計に幼い子どもにしか思えない態度だ。

「はあ……もういいよ。先生の部下なら安心だろうからね」

しゃがんだまま、ウォルトは顔を上げると微笑みレンの頭を撫でた。

そのまま、レンの膝の上から飴玉を三個ほど取って立ち上がる。
「そろそろ帰ろうか。今日のうちにやりたいこともあるからね」

包み紙をはがして、飴玉を口の中に放り込む。うつすら赤みがかった飴玉は、甘いイチゴの味がした。

レンは膝の上の菓子を両手に持って立ち上がる。

「それでは先生、また」

「さよならー」

「ああ、怪我の方大事にな。あまり無理はするな」

「……と、そういえば先生」

ウォルトは踏み出しかけた足を止めた。

「いつ、気付いてたんですか、この怪我」

先ほどは皇帝に対する進言に驚愕していたため、気に留める余裕がなかったが、考えてみればそのようなことには一言も触れていないのだ。

「そんだけ薬の匂いをさせて気が付かないわけないだろう。大丈夫そうだが化膿しないよう、よく気をつけておけよ」

心配そうに付け足された言葉に、ウォルトは口の中の飴玉を吹き出しそうになった。

引き攣り笑いを浮かべるウォルトの横で、レンは抑えきれない様子でクスクスと笑った。

「リオン先生、あと1週間早く言ってくればよかったのに」

笑いながらレンが言うつと、リオンも二人が笑う理由を理解した。

「まったく、お前の治療嫌いもたいしたもんだな。明日からは注意しろよ」

「……肝に銘じておきまーす」

気まずくて小声で返事をすると、ウォルトは逃げるように身を小さくして歩き始める。慌てて追いかけるレンの手からは幾つかの飴が落ちたが、それを拾うことはしなかった。

来たときと同様、城の正門から外へと出て行く。

「……ウォルト」

「ん？」

城下町の石畳には、落ちた紅葉が敷き詰められている。それを踏みしめる音は乾いてどこか寂しい。

「明日から、また遠征？」

ウォルトを横目で見上げるレンは不安そうだ。

「そうだよ、また、ね」

歩みを止めて、ウォルトは肩を竦める。丁度食事処の前だったため、甘いような香りが鼻腔をくすぐった。

「レンは行くのもう嫌？」

「俺が、とか、そういうんじゃない……」

俯いてしまった精霊の口調は歯切れ悪い。暗く沈んだ声音は少々聞き取りづらい。

「ウォルトは怪我してるのに、休む暇もないじゃないか」

「俺だけじゃないよ。休む暇なく働いている兵はたくさんいる」

ウォルトが知るはずもないことだが、それは先ほどアザゼルが言った言葉と同じだった。

「でも、ウォルトは！ 魔法を拒否する体質で……」

勢いよく顔を上げて言い募る。

ウォルトが、特別な理由。魔術師の家系でありながら、魔法が使えない理由。

「他の人とは違うんだよ。魔力が全部消えちゃうなんて」

皮膚のように張り巡らされた、魔力を無効化する術式。ウォルトには先天的にこれが付き纏っていた。

外側から向けられた魔力はすべて掻き消える。

体の内部の魔力は外に出す寸前で無力に変わる。

「攻撃魔法が効かないのは助かるけど…… 治癒魔法も、全部だから……」

だから、レンは不安なのだ。

他の兵士たちは怪我をしてもすぐ治療できる。命に関わる怪我でも、助かる可能性が残っている。

「今回は大した事なかったからいいけど、もし大怪我でもしたら！」

言い募っているうちに感情が高ぶってきたようで、レンの瞳には涙が溜まっている。

「あーもう、心配しすぎだよ、泣き虫さん」

ウォルトはガシガシと己の白髪を掻いた。この精霊はよく泣くが、それでも泣かれるのに慣れることはできない。

先ほどレンの膝の上から取った飴の一つを、レンの唇に押し当てる。精霊は大人しくそれを口の中に入れた。

「大丈夫だよ。もし俺が大怪我しそうだったら、レンが補助してくれるといいんだから」

口の中で飴玉を転がしながら頷くレンの頭を撫でると、ウォルトは再び歩き出した。

大丈夫、と何度も安心させるように繰り返して。

5話 本職

レンが研究室を覗くと、机に向かっているウォルトの背中が見えた。

ランプの薄明かりに照らされた室内は、ギッシリと詰め込まれた書物や実験器具で埋まっている。

「ウォルトー、もう1時だよー」

室内に入ると、図面や本を踏まないよう注意を払ってウォルトに近付く。

だが、ウォルトは声をかけられても、隣にレンが立ってもそのことに気付かない。

レンはそれにも慣れたもので、机の上に視線を投げかけた。

うつすら黄色がかった古い紙には魔術式の羅列と魔方陣が描かれている。カプセル、薬液の入ったフラスコ、書物を前にして、ウォルトは思索に耽っていた。

レンは腰を屈めると、そのウォルトの耳を引っつかんだ。

「ウォ・ル・トー!!」

肺いっぱい吸い込んだ空気をいつきに消費する大声をウォルトの耳に叩きつける。

脳を直接揺さぶられるかのような衝撃に、ウォルトは目を回しながら耳を押さえた。

「レ、レン。今のは、流石に痛いよ……」

「もう1時だよ。7時には出発するんだから、もう寝ないと」

抗議の言葉を口にするウォルトをさらりと無視して、レンは要件を告げる。

「あー、もうそんな時間か。片付けてから寝るよ、ありがとう」

ウォルトが図面をたたみ始めるのを確認すると、レンは回れ右をして寝室に向かう。否、向かおうとした。

「あ、ちよつと待って」

積み重なった本を跨ごうとしたところで呼び止められたため、本を蹴り飛ばし、しかも紙で滑ってしまった。

慌てて体勢を立て直し、こっそりと本を元通りに戻す。と言ったところで、本の山を崩したところもバツチリウォルトには見られてしまっていたが。

クスクスと笑われて、レンはうつすら頬を赤らめた。

「何？」

恥ずかしさから、問う声も自然と不機嫌なものになってしまう。

「ちょっとね、レンにプレゼント」

ウォルトの差し出した手には、掌に乗る程度の小さな箱が乗っていた。箱に合わせたクッションの上には、赤いピアスが一つ鎮座している。

レンはそのピアスを摘み上げた。

「何これ、魔力の結晶……？」

硝子細工にも似た、透明の赤。ウォルトの魔力は皮膚を通過することができないが、注射器を使って血液ごと抜き取ることはできる。ランプの明かりに当てると、幾何学模様が透かしで入っているのが見えた。

「複合式、かな？」

「正解。よく分かったね」

直径にして5ミリ程度しかないその結晶には、立体的に絡み合った3つの魔方陣が入っている。

しかし、あまりに小さくてそれが何を表すものかまでは、レンに見ることはできなかった。

「つけてごらん」

実体化してはいるものの、元々が精神体である精霊のこと。簡単にそのピアスを耳に通すことができる。留め具を嵌めて、レンは少し様子を見る。

「うーん、ちょっと体が軽くなった…気がする、かも。これ、何？」
「連結と吸収、固定の術式が入ってる。俺の中の魔力と繋げて、そ

うちのピアスの所有者が吸収、固定して使えるようにしたんだ。レンが俺から魔力を少しでもスムーズに取れるようにと思ってね」

傍にいただけでも、実体化に十分な魔力は得られる。だが、それ以外はレンの負担が大きすぎたのだ。

「へえー……。ていうか、やっぱりウォルト器用だね。全然何書いてあるかわかんないよ」

「まあ、一応こっちが本職だからね」

普段は剣士として城の要請を受けているものの、実際にウォルトが名乗る職業は魔術具職人である。とは言え、最近是要請に次ぐ要請で研究や製作に充てる時間が殆んどないというのが現状だ。

「それにね、最初はもっと大きかったんだよ。俺が直接触ったせいで縮んじやっただけ」

魔方阵を掘り込む際には、できるだけ触らないように器具を使って抑えている。それでも時々動かしたり、失敗した時には触ってしまう。

「でもやっぱり凄いや。オレには無理だもん」

「あはは。ありがと」

レンは素直に主人を賞賛した。左耳につけたピアスを嬉しそうにずっと手で弄る、その様子は子どもが新品のおもちゃにずっと触っている様子によく似ている。

「それはまだ試作段階だけど、もう少し研究して精度のいいの作ってあげるからね」

「これじゃまだダメなの？」

「連結がいまいち。他の魔術師が自分の精霊と使うんなら何の問題もないんだけど、俺からだと一度に少ししか使えないんだ」

説明しながら、ウォルトは机の上に散らばったカプセルをケースに入れる。畳んだ図面は本と共に重ねて机の端に。

図面を書くのに使った道具を引き出しに入れ、ボタンと閉じる。ウォルトは椅子の前からどいて、机の下に椅子を収納する。

「これが完成したら、レンも今までよりもっと強い魔法使えるよう

になるよ」

今のレンは、全部自分の力だけで魔法を使っている。これでは、主人から魔力の供給を受けている他の精霊に劣るのは当然と言えた。「そっか。それじゃあ、そうしたらもつとちゃんとウォルトの補助ができるようになるんだ」

「うん、俺が死なないよう、よろしくね」

恐らく、とウォルトは考える。

もし、レン以外の精霊が魔力の供給も受けずに長時間実体化し、魔法を使っていたらとづくに力を使い果たし消滅しているだろう。少なくとも、ウォルトが書物で知っていた精霊たちで主人のいないものはすぐに消滅してしまっている。

もしこれで、十分に魔力の供給がなされたら。

どれだけの力を持っているのだろう。

それは恐ろしくも興味がそそられる。

「さて、遅くなっちゃったね。早く寝よう」

ランプを手に取り、二人は部屋の外へと出る。扉を閉める音と共に、室内は闇に閉ざされた。

5話 本職（後書き）

個人的には大変楽しく書けた内容でした。
次回から物語が動きます。

6話 出発

朝の爽やかな風が吹き抜ける城下町は、まだどの店も閉ざされ眠っている。

城壁の外に広がるのは光を浴びる緑の草原。

それら両方を見渡す位置にある厩うまやは、旅人の馬を預かり、また育てた馬を貸し与えている。

「どうですか、最近景気は」

城門前、馬の黒い毛並みを撫でながらウォルトは厩の主人に尋ねた。艶のある青鹿毛、確かこの厩ではあまり見ない類だったはずだが。

「いまいちだね。移動魔法のが金もかからんし、手軽、しかも早いときた。酔狂な旅人が行商人くらいしか来んよ」

ごま塩頭の主人は、啞えていた煙管を手にとって答えた。

「それは困りますね。ここが使えなくなったらレンに乘せてもらわないと」

「俺そんなに長距離飛べないよ」

「人の商売を勝手に潰さんでくれ」

軽口を叩きながら、ウォルトは黒馬にまたがる。

しゅる、と布の擦れるような音がしたかと思うと、精霊は本来の姿である黒翼の鳥へと姿を変じた。鳥は一つ羽ばたくとウォルトの肩にその居を定める。

「少なくとも、次回も俺はここで借りさせていただきますよ」

「もっと労って乗ってくれば最高の常連客なんだがなあ」

ぼやく声に重い門の音が重なった。

見晴るかす草原に目を細めると、馬を進める。数歩進むと、今度は後方が再び門の軋んだ音が響く。

重く閉ざされた音は大きく、だからウォルトにも、レンや勿論黒馬にも、主人の言葉を聞くことはできなかった。

『本当に……最高の常連客だったんだが……』

王都の城壁が見えなくなり、進むにつれ徐々に緑は減って行く。物資補給用に作られた街道の周りは、左側に山、右側に大地が広がっていた。

ちら、と馬の背を振り返る。支給された食料と金貨が詰まれた袋がそこには積まれていた。食料は僅かで、殆んどが金貨である。

馬での行程は、目的地まで戦況の報告を行う早駆けの馬でも10日はかかるだろう。だが、それでは馬にも人にも負担が大きすぎる。あまりのんびりもしてはられないが、無理をせずに行くには途中で何度も町で食料の補給をしなければならぬだろう。

そんなことをウォルトが考えていると、ふいに肩にとまっていたレンが高く飛び上がった。

ウォルトは黒馬の歩みを止め、耳を澄ませる。

複数の人間の足音、ひそめた息遣いの気配だけが感じられた。

素早く辺りを見渡すが、ただ広がる大地だけが見える。

見通しは良好 いや、見えない場所ならば、ある。

ウォルトは腰に差した剣を抜き放ち、上に向かって一閃。真つ二つになった矢が地に落ちた。

「レン！」

鋭く名を呼ぶと、心得た精霊は呪文の詠唱を始める。既に鳥の姿ではなく、黒い翼のみそのままに人の姿へと変わっている。

「湖面の盾」

レンが手を上げると第二撃は同時だった。切り立った山の上から、幾本もの矢が降り注ぐ。

しかしそれは、湖に吸い込まれるがごとく先から柄と順番に消えていった。

続いて2度、3度と分けて放たれた矢も、ことごとくその存在を消されてしまう。

これ以上は矢の無駄と悟った崖の上の一団が、滑るように駆け下りてきた。勢いを抑えながらの滑降は大量の土煙を巻き起こし、視界を土色に埋める。

数は20程だろうか。一団は素早い動きでウォルトの乗る馬を取り囲んだ。

「……レン、馬の方は任せた」

身を翻し、馬上から飛び降りながらウォルトはレンに命じる。レンに背中側を預け、前方の盗賊たちに相對する。

相手は徒歩なのだから、掻き分けて逃げることもできる。だが、その際に馬を傷付けられでもしたら困るのだ。

ウォルトは真っ直ぐ立つと、抜き放った剣を掲げた。

「かような行動、国王勅命の兵と知つてのことか」

徐々に収まる土煙の中、陽光を反射する剣、その鏢には確かに国紋が掘り込まれている。

これを持つ者には、手厚く保護を与えよという国を挙げての宣言。また、危害を加えることは何人たりとも許されることはない、その証明。

なれば、荒野の盗賊も手出しは控えるようにするものだが。

しかし返事は嘲笑だけであつた。

仕方ない、と低く剣を構えなおす。

地を蹴つたのは、一人の盗賊が振り下ろした剣閃を避けるため。攻撃を仕掛けたために集団から外れた一人の剣を叩き落し、頭部に剣の腹で殴りつける。

相手が倒れるのを横目で確認しながら、振り向きざまに次の一人を片付ける。

それを見て集団はたじろいだが、それならばと一斉に突進してくる。何の作戦も立てられていない、ただの突進であつた。

「統制が取れていないな……」

今までにウォルトは幾度も戦場で似たような場面に遭遇した。それは領主の私兵であつたり、異国の軍隊でもあつた。

それに比べれば、これくらいの数の盗賊など、恐れるほどのものではない。

真っ直ぐ前へと駆け出して、虚をつかれて一歩引いた一人をなぎ払う。そうしてできた空間から円の外へと抜ける。

一人二人と切り伏せ、殴り倒していく。その間に、一人が仲間を置いて逃げ出したがウォルトもレンもそれを追うことはしなかった。「ちっ……馬だけでも押さえる！」

レンの方へと三人の盗賊が対象を変える。短剣を振りかざして向かってくる彼らに向かい、レンは右手を差し出した。

「針の雨！」

呪文を受けて現れたのは、レンと盗賊たちの間を阻むように降る雨。降ると地に突き刺さって消える。

その範囲は徐々に広がり、盗賊たちを包み込んだ。突き刺さる針は流れる血と混ざり合う。

「ごめんね、暫く寝ててね」

瞬間、微かにだがレンの瞳には悲しげな色が宿った。次の瞬間には感傷はすっかり消え、水が盗賊たちの顔を覆う。

苦しげに水を剥がそうともかく盗賊たちが気を失うのを確認して、レンが水を引いたときには既に残っている盗賊は一人だった。

ウォルトは微かに息を乱しているものの、怪我をしてはいない。残りの一人に剣先を向け、息をつく。

「俺は別に治安維持の任は負っていない。このまま去ってくれればそれで構わない」

数歩離れた先の盗賊は、呻いて俯いたが、すぐにク、と喉の奥で笑った。

「その甘さが命取りだ」

「っ!？」

ウォルトの足首が突然掴まれた。下方を確認すると、気絶しているとはかり思っていた盗賊が倒れながらも足首を掴んでいる。

周囲からボコツという異音が湧き上がった。ウォルトは警戒の視

線を周囲に走らせる。

変化は何も見受けられない。だが……今、足元から振動が伝わったのは気のせいかな？

「グレイブ！」

盗賊の口から発せられたのは、土を操る魔法。

咄嗟に剣を握りなおし、視線をめぐらせたそのとき。

周囲の地面が高く、高く盛り上がった。

上部から、ウォルトめがけて降下する山。これでは、いくら魔力を無効化しても意味がない。

土煙が舞い上がり、視界を遮る。

全ての土が落ちきり、土煙が収まった頃に残ったのは小さな塚。

「生き埋めだあ、アハハハハハ！」

勝ち誇った笑い声が響く。

「墓を建てる手間が省けてよかったなあ、精霊？」

盗賊はレンを振り返り、近付いてくる。ニヤニヤといやらしくゆがめられた口元に嫌悪感を示して、レンは目を細めた。激闘を勝ち抜けた喜びからだろうか、盗賊の口調には隠しきれない興奮が滲んでいる。

「珍しい黒い翼だからな。高く売れるぞ」

「それじゃあ、俺にも分け前あるかな？」

「おう、山分けに……？！」

ケホン、と小さな咳が聞こえると共に、頬に押し付けられる冷たく硬質な感触に、盗賊は身を強張らせた。

白髪を土で茶色く汚したウォルトが、盗賊に剣を突きつけている。忙しく視線をめぐらした盗賊は塚盛を確認するが、先ほどのまま、崩れていない。

「飼い主の許可なく生き物を売らないように」

静かに冷え切った声が盗賊の耳を打つ。

この世に別れを告げる男に投げかけるには、優しさの欠片もない餞別だった。

6話 出発（後書き）

バトルが難しい…

7話 赤風

「ごめん、ありがとうレン」

頭や肩にかかっている土を払い、ウォルトはレンを振り返った。

「怪我がないようで、何より」

ホッとしたようにレンは微笑む。

盛り上がる土で視界が覆われる頃、水の鎌がウォルトの足首を掴む盗賊の手を切りつけた。

手が緩んだ隙に、ウォルトは魔法を放った盗賊の反対側へと抜け出したのだ。暫くは塚の裏に身を潜め、相手の油断を誘い、後は見たとおり。

血で汚れた剣を紙で拭い、鞘に収める。

「助かったよ。それに、いいことも聞けたし」

「いいこと？」

「高く売れるってさ」

ニヤリと、いたずら小僧の笑みを浮かべながら、ウォルトは馬に跨る。

「金に困つ……」

「お金に困っても売らないでね」

ウォルトが言い切るより先に、釘を刺す。その目は笑っていない。

「アタリマエジャナイデスカ」

「何でカタコトなの」

「ごめんごめん」

ウォルトを睨むレンの目に涙が浮かび始めるのを見て、ウォルトは慌てて謝る。だが、笑いながら謝られてもレンの不満は収まらない。

むくれてそっぽを向いていると、唐突にウォルトの笑い声が消えた。身にまとう気配も急に硬質なものと変化している。

「ウォルト？」

急に真剣な顔をして考え込んでしまったウォルトを訝しんで、表情を伺う。

「え？ ああ、いや……なんでもないよ。先を急ごう」

にこりと笑い、ウォルトとはレンに腕を差し出す。鳥の姿になれという合図を受けて、レンは再び鳥に戻り、ウォルトの肩にとまった。馬を進める間、ウォルトは思う。

先ほどの盗賊たちは、何か妙だった。

最後の盗賊が放った魔法は、かなりの魔力を要する大技だったはず。あれだけの魔力を持ちながら、何故最後まで使わなかったのか（まさか、俺に魔法が効かないことを知っていた？）

あの魔法なら、魔力が消えても関係なく、対象を生き埋めにできる。

（いや、俺のこと自体は噂で知っていてもおかしくはないか。黒い鳥を連れた白髪の男、なんてそうそういるもんじゃない。だけど……俺が通ることを知っていた理由は？ 偶然という様子じゃなかったぞ？）

次から次へと疑問が湧いてくる。これは、何者かに仕組まれたことなのではないか。

「暫く、様子を見るか」

ウォルトは頭を軽く搔くと、馬の背に積んである荷物に手を伸ばした。袋の中から取り出すのは、王都周辺の地図。

馬の手綱を片手に絡め、地図を広げる。レンも身を屈めて地図を覗き込んできた。

「日暮れまでに着ける町は……」

一方、取り残された盗賊たちは。

一名が命を失い、数名が逃げ。そして残った者たちは集まり座り込んでいた。

「くそっ、何なんだアイツ！」

「あそこまで強えなんて聞いてねえぞ」

全員の傷は既に癒えている。この中に治癒魔法を使える者がいたのであろう。

口々に不平を並び立て、お互いを慰めあっていた。

「もう降りるぜ俺は！ あんなはした金で命捨てられるかよ！」

一人の男が立ち上がる。それを止める者はいない。皆が同じように思っていたのだ。

一人が言えば、あとは早かった。一人、また一人と計画の断念を表明する。

と、一陣の風が吹き、砂埃を巻き上げた。

「失敗したか。使えない奴らだ」

赤い、目視できる風が収まると、腰まである長い銀髪の男が現れた。細身の男は冷たく盗賊たちを見据える。

「あんたは……」

どよめきが盗賊たちの間に走る。

「話が違うじゃねえか、俺たちはもう降りる！」

「何が違う？ 私は、魔法の効かぬ剣士を殺せ、と言った筈だが」
筋骨たくましい盗賊たちにすごまれても、男の冷徹な瞳は全く揺らがない。今にも掴みかかりそうな盗賊たちを鼻で笑う。

「貴様らのような雑魚どもに依頼したのが間違いだったようだな」

「つてめえ！」

侮辱を受けた盗賊たちは顔を赤くし、いきり立つ。

「否定できるのか？ 大人数でかかっておきながら男一人殺すこともできないお前らが」

殊更に男は盗賊たちの怒りを煽る発言を繰り返す。

一人の盗賊が短剣を抜く。

「報酬をもらい損なつたんだ。このままじゃ帰れねえ」

続いて他の者たちも同様に武器を手取る。

「身形から察するにいいとこの貴族だろう？ あんたの持ち物売りやあ結構な金になるだろ」

「ふん…痴れ者が」

男は口の端を釣り上げ、静かに片腕を前へと差し出した。その間に、武器を持つ盗賊はじりじりと間をつめる。中には呪文の詠唱を始めるものもあった。

一斉に男に突きたてられる武器、放たれる魔法。

血しぶきが上がり男は血に倒れ…る筈であった。そうでなければおかしい。

「なっ……！」

武器も魔法もすべて男を通り抜け、何の手応えも盗賊には伝わらない。

「実体じゃないのか……？」

呟きに、クスクスと男は笑った。

「実体じゃないものか。私は確かにここにいる。もともと、貴様らには私に傷一つ付けることなどできないであろうがな」

「くっ」

焦りながらも盗賊たちは、幾度も男を斬りつける。だが、どれも男に傷をつけることはなかった。

盗賊たちの表情に恐怖が滲む。逆上した盗賊たちは無茶苦茶に剣を振り回していた。

「貴様らはもう用済みだ」

男が差し伸べた手を返したその時。

盗賊たちは、物言わぬ肉片に化していた。

血しぶきを浴びて立つ男の肩に、一人の女がもたれかかる。

背から白い翼を生やした女は、ウェーブがかった髪が頬にかかるのにも構わずうっとり笑っている。

「ホント、身の程をわきまえない男って嫌だね」

クスクスと無邪気な笑い声をあげ、男に瘦身を摺り寄せる。男の顎に手をかける指はほっそりと白い。

「ねえ、早くあの身の程知らずも斬らせてよ。自分の身の丈に合わない精霊を連れてる子」

「まあ待て。我々が直接手を下す必要もないことだ」

女の髪を柔らかく梳き、男は静かに諭すように話す。

赤い風が、一瞬にして盗賊たちの血を乾かし、空気に溶かしていった。

「さて、次の手を打たねばな」

7話 赤風（後書き）

このあと少々プロットを練り直したいので、少々更新速度が落ちるかもしれません。

8話 夜半

日没を正面に見る進路。既に眩しく感じる高さは超えてしまった。
『町が見えてきたよ』

上空の鳥が告げる。茜色よりもやや暗くなってきた空に、その姿は溶けてしまいそうだ。

「大分暗くなってきたけど、大丈夫？」

『俺、別に鳥目じゃないよ』

いくらか高度を下げて、鳥は（実際鳥のくせに）抗議してきた。

「じゃあ、猛禽類だったの？」

『そうじゃなくて』

ふおん、と風の吹く音と同時にレンは空中で一回転する。そうすれば、すぐに翼だけはそのままに人の姿に変わる。

「俺の目は人間と同じだと思うよ」

馬の足を緩めることなく、ウォルトは斜め上に陣取るレンを見上げた。レンの降りてきた位置は丁度ウォルトの視界を塞いでしまうのだが、障害物もないので気にせず話を続ける。

今までレンは色に関してウォルトと認識が異なったことはないし、多少暗くても視界は利く。暗闇では人間と同様行動に制限が付く。

「そりゃオレは人間じゃないから、実際の人間がどう見えてるのか分からないけど……」

「なるほど。それは確かに」

納得したようにウォルトは頷く。だが、そのタイミングが今の話題の本筋から逸れていたため、レンは首を傾げた。

ウォルトは、一度自分の後ろを指差す。危ないから後ろに座れ、と。

「人間同士だって、相手の目から物を見れるわけじゃないんだから」「意味が分からないよ」

随分唐突だ。指示された通りウォルトの後ろで馬に跨りながら、

レンは思った。

「いや、比喻でも何でもなく言葉そのままの意味だよ。

例えばりんごがあつたとして、俺とレンで全く見え方が違ったとする。だけとお互い、それはりんごという名前で赤い色をしている、という認識をしているだけかもしれない。人間同士でもそういった齟齬^{そご}はあるかもしれないよ」

少しだけ肩越しにレンを振り返りながらウォルトは微笑んだ。

「んー……言いたいことはなんとなくは分かったけど」

「けど？」

「とりあえずオレは鳥目じゃないよ」

拗ねた声で話題を元に戻す精霊に、主人の方は声を上げて笑う。

分かってるよ、と笑い声の間に一言、優しい声が混じる。

拗ねた表情を前に座るウォルトの背に押し付けながら、レンは考える。

言葉そのままの意味、とウォルトは言った。それは半分本当、半分は嘘。人との違いに悩みを抱える主人のことだから、言いながら考えの違いに思いを至らしていることだろう。

「ウォルトって変に真面目だね」

「どうしたの、いきなり」

「別にー」

言ったきり、レンは再び鳥の姿になっていた。鳥になっても会話ができるが、人型のほうが何かと都合がいい。それを鳥になるのだから、この話はおしまい、ということだ。

レンに話す気がないのなら、ウォルトも無理に問い詰めることはない。

それに、もう目の前に町の門が迫っている。

馬の背から降りて、手綱を引きながら門をくぐった。

王都から伸びる街道を通っただけあり、訪れた町は日が落ちても立ち並ぶ商店の灯りが満ちている。大きな町ではないが、人も多く賑わっている。

「さあて、早く宿に行って休もうかー」

わざとらしいくらいに大仰に伸びをして、馬の上にいるレンを振り返る。視線が合うと、ウォルトがにつこりと笑う。

何か含みがあるようなその表情に黒い鳥は不思議そうに首を傾げた。

宿の一室には静寂が満ちていた。

窓から差し込むのは僅かな月明かりだけで、寝台の上の膨らみを照らす。

音もなく、部屋の扉が開いた。体格のいい男の影が隙間から滑り込んでくる。

気配を殺した影は月明かりを頼りに寝台に近付き、短剣を抜く。

静かな室内に、微かな鞘走りが響いた。

侵入者は両手で持った短剣を振りかぶると、寝台の膨らみにいきいきに突き立てた。

布団の中に詰められていた羽根が舞い上がる。

「……？」

突き立てた手に伝わってくる感触に違和感を覚え、侵入者は布団を引っぺがした。

布団の下膨らみの正体、それはやはり丸められた布団であった。失敗した、と暗殺者は慌てて身を翻そうとする。しかし振り向く直前に背中から蹴り倒され、組み敷かれてしまう。

振り払おうとした途端、顔の横には長剣が突き立てられていた。「来ると思ってたよ。誰の差し金だ？」

暗殺者の背中に膝を乗せて、ウォルトは静かに問う。お互いにつすらししか相手の姿を確認できない。

「……」

「もっとも、大体予想は付いてるけど。国のお偉方だろう？」

確認の問いに、侵入者の体が微かに震えた。その反応を見てウォルトは唇を噛む。まだ予想の範囲を出ていなかったのだが、これではほぼ確定と見ていい。

「やっぱりか……」

明らかな落胆。だがそれでも、ウォルトの口調は静かで、優しかった。

こんな状況でも、それは不気味な静けさではない。本気で争う意思などないのだと、侵入者にもそれが伝わった。

「それで、誰なのか言う気になった？ 今後の身の振り方を決める上でも聞いておきたいんだけど」

「……今後の身の振りなんて考えても仕方ないでしょう。外の兵が既に逃げ道は塞いでいる」

「あなたは……」

侵入者の声に、ウォルトは覚えがあつた。問い詰めようと口を開きかけるが、それを遮るように窓が開く。

「外に10人くらい軍の人が来てたんだけど……」

窓から入ってきたレンは困惑を隠せない。ウォルトの指示で馬を見張っていたところを突然囲まれた。

『え……なんで？』

見覚えのある格好。それもそのはず、軍の剣士部隊の面々なのだから。

手っ取り早く全員を眠らせ、そして部屋に戻れば今度はウォルトが男を取り押さえている。困惑しないはずがなかった。

「レン、灯り」

既に抵抗を諦めている侵入者だが、ウォルトは組み敷く力を弱めたりはしない。

レンが灯をつけたランプをかざし、侵入者の顔を照らす。

照らし出された顔には覆面が掛けられていた。それをさがして、ウォルトは溜息をついた。

「ザファイケルさん……」

吐き出した声は悲しみに染まっていた。
侵入者は、リオンの部下の一人であった。

8話 夜半（後書き）

まだ暫くはゆっくり更新です。

9 話 奔走

己の命を狙ってきた暗殺者が知人であったことに、ウォルトはひどく落胆していた。それでも彼は冷静に、組み伏せた相手を解放する。

「このことを先生は……シャマイン先生は知っているんですか？」

「隊長がこんなことを許すわけないでしょう。隊長は今晚から自宅に帰っていますよ」

ザフィケルの返答に、目に見えてウォルトの緊張が和らいだ。それだけリオンはウォルトにとって特別な意味を持つ。

「剣士の部隊長に何の断りもなく隊を動かせる人間ってことが……」
剣を鞘に戻し、床に座り込む。真剣に考え込みながらも、まだザフィケルに対する警戒を完全に解いたわけではなかった。

「で、あなたは俺を殺して帰らなければ、立場を失うわけですが」
穏やかな双眸は油断なくザフィケルを見据え、探っている。

「ウォルト卿。貴方と私の実力差は知っているつもりです。奇襲に失敗した今、もう俺にはどうしようもありません。それに、隊長の愛弟子を殺すことには抵抗があります」

「ザフィケルさん」

一度、名を呼んだがウォルトはそこで目を伏せた。

聞きたいことは沢山あるが、どれも言葉をまとめることができないでいた。また、聞いたところでどうなるものでもない。

「貴方は確か、国境の町出身でしたよね？」

ようやく音になった問い、それはレンにもザフィケルにも予想外のものだった。

「え、はい。レイジットですけど……」

「大河から引いた水路の有名な町ですね」

考え込むように口元に指を当て、ウォルトはレンを振り返った。
「レン、転移魔法できるくらいの魔力残ってる？」

「へ？ 一人くらいなら送れると思うけど」

突然の問いにレンは闇を溶かした瞳を丸くした。その返答にウォルトは頷くと再びザフィケルに向き直る。

「もし、貴方を俺に差し向けたのが国の幹部であればの話ですが、役目を果たせなかった貴方は始末されるでしょう」

「っ……………」

ザフィケルは俯き唇を噛んだ。

これで確定、ウォルトは内心で溜息をつくが表面上は何事もないように続ける。

「ここで俺が貴方を殺したということにしましょう。貴方が王都には戻らず、故郷に帰るつもりなら、ですが」

ウォルトの思惑を心得たレンは、部屋の隅に置かれた荷物から箱を取り出した。箱の中には白墨が五本入っている。

「選択肢は三つです。俺と殺し合いをするか、王都に戻り処刑されるか、故郷に帰るか」

レンの持つ箱から白墨を取り、指先で弄びながらウォルトは問う。指と擦れて白墨から僅かに白い粉が落ちた。

「…………… 邦に帰ります」

ようやく絞り出された声は、悔しげだった。提示された選択肢、命が惜しいのならばこれを選ぶしかない。

「分かりました。では」

一方のウォルトはホッとしたようだ。目元が柔らかくなっている。板張りの床にしゃがみ込むと、成人男子が胡坐をかけるだけの範囲に円を描く。手馴れた所作で書き込まれていく魔方陣に歪みは見られない。

「よっし。できた、と」

最後の線を繋げて、ウォルトは屈めていた腰を伸ばす。指を擦り合わせて白墨の粉を落とすのを見て、レンは魔方陣の横に立った。

「ザフィケルさん。レイジットまで、お送りします。魔法陣の中に入ってください」

ザファイケルは躊躇っていた。立ち上がる動作もゆっくりで、足取りも重い。

しかし、決心したように床に描かれた魔法陣の上に立つ。

「いいんですか…俺を見逃して…」

「いいも何も」

ザファイケルの問いに、意外そうに返事をする。

「上官に命じられたことに従うのは当然のこと。貴方は、俺を殺したくないと言いました。俺にはそれで十分です」

「……お人よし、ですね。本当に」

ウォルトは困ったように笑う。甘すぎるという自覚はあるが、そう簡単に変えることもできない。

「クールだからね、ウォルトは」

「？」

レンの呟きに、不思議そうにザファイケルは目を瞬いた。だが、すぐにレンが呪文の詠唱を始めてしまった為、問うことはできない。

「水辺に出ますから、気をつけてくださいね」

一步、ウォルトは魔方阵から離れる。近くにいては現在詠唱中の魔法が無効になる可能性がある。

「全ては母なる海に通ずる道…」

澄んだ声が紡ぐ詠唱、歌うように流れる声の余韻。

「流水の道」

声が途切れると、ザファイケルの姿がぶれ始めた。不鮮明な画像のように、粗い粒子に分けられる。

「言い忘れていました……」

ノイズ交じりの声。殆んどその姿は消えかけているときに、口の空洞だけがひどく目立つ。

「俺に、命令を下し、人の名は……」

「っもう一度、言ってください！」

ノイズだけでなく、声も既に途切れ途切れにしか聞こえない。聞き取ることができずに、ウォルトは勢い込んで叫ぶ。

「誰ですか、それは……！」

「……皇、側近の……ト・ハーデ……」

完全に、ザフィケルの姿が消えた。彼が立っていた魔法陣ごと、水路の町レイジットへと送られたのだ。

部分しか聞き取れなかったが、十分だ。力なく、ウォルトは床に座り込む。

「そっか。完全に、国家レベルだなあ……」

「ウォルト……っつ」

気遣わしげに主人の名を呼ぶ精霊は、急に痛み表情を歪ませ耳を押さえた。

一瞬のちくりと針が刺さるような痛み、すぐに治まり手を離す。

「ピアスが……」

昨晚渡された魔術具が崩れだした。乾いた血が崩れ落ちるように、砂となり床に落ちる。

膝立ちで横に立つレンの耳元を見て、ウォルトはああ、と頷いた。「使用制限過ぎちゃったんだね。壊れる時に使用者に影響があることを考慮に入れてなかったな、ごめん」

謝りながら精霊の耳に触れ、そのまま頭を撫でる。

「一日で魔法使わせすぎちゃったね。暫く休んでていいよ」

「でも……いや、うん。そうだね、ちよつと眠い……」

盗賊との戦闘、追手の一掃、そして転移魔法。ピアスの効力がなければとつくに実体を保てなくなるところだ。

徐々にレンの体から部屋の闇が透けて見え始めた。

「おやすみ。これからのことは、また後で話すよ」

「うん……」

そうして完全に精霊の姿が闇に同化すると、ウォルトは壁に背を預けた。

深い溜息、前髪を掴んで俯く。

「まいったなあ。なんでいきなり」

吐き出される呟きはのんびりと夜気を揺らす。

ザフィケルの発言が真実であるとしてだが。

側近であるハーデスが動いたということは十中八九皇帝からの命令と見ていい。昨日、いや日付は変わったから一昨日か。任務の依頼を受けたばかりだと言うのに、一転して今度はお尋ね者扱いとは「俺以外に使えるそんな人でも出てきたのか？」

再び、溜息が零れる。

何が起きているのか、ウォルトは理解できないでいた。いつになく暗く沈んだ面持ち、今にも泣き出しそうな瞳で、小さく嗚咽を洩らす。

嗚咽は今にも慟哭となつて溢れ出しそうな響きを帯びていたが、残った理性がそれを押し留める。

どれほど俯き、唇を噛み締めていただろう。ゆらり、と立ち上がったウォルトの穏やかな表情は既に常のものと変わらない。

先ほどレンが言つた「クール」という言葉はこうして感情を切り替えられる冷静さにある。そのことを思い出し、ウォルトの精神的余裕が増した。

「いい精霊をもつたなあ、ホントに」

口元に笑みを乗せて、ローブを羽織る。

「お礼のためにも長生きしないとね」

先ほど使用した白墨を箱に戻し、荷物を担ぎ上げる。剣を腰に差し、窓辺から外の様子を窺つたが、人影も見当たらなかった。

窓枠に手を掛け、屋外へと身を躍らせる。二階の高さをものともせず、地に下りて、そのまま馬に跨り出立する。乗ってきた馬ではなく、他の客が乗ってきたものであったが。

ザフィケルのように故郷へ向かうわけにはいかない。遠くへ行かなければ。

追手の手にかからないように、遠くへ。

闇の中ですら尚白い髪を風に揺らして青年は、より深い夜の方へと走っていった。

9 話 奔走（後書き）

ここで、一章が終わりです。

10話 点る灯

日暮れ後の空気はひんやりと冷たい。

暗い空の下を、リオンはゆったりとした足取りで歩いていた。それは、敢えて心を穏やかに保とうと努めてのことである。

貴族の屋敷が立ち並ぶ、城に程近い高級住宅街。ここを歩く時、いつもリオンは落ち着かない気分には駆られていた。

誰もいないのに、誰かがいる。

様々な精霊たちが歓談している気配がする。これが実体化してしてくれたらまだ気にならないのだが、夜の帳が下りた中騒がしくするわけにはいかないと、姿を消し声も人間には聞こえなくしている。ざわめく気配ばかりを感じるのだから、精霊たちだと分かっている。でも気味が悪かった。

広大な屋敷が続くこの区画の中でも一際立派な屋敷の門をくぐる。名門・ラヴェール家。

扉の隣には明かりが点され、掌に乗るほど小さな精霊がそれを守っていた。

少女の姿に昆虫のような薄い羽根。灯りを守る精霊自身も、淡く光を放っている。

「あれー、リオン。どしたのー？」

少女の姿をした精霊は、間延びした声を出して首を傾げる。

「イライアス様と少々話がしたくてな。取り次いでもらえるか？」

「うんー、ちよっと待っててねー」

ポンツと空気の抜けるような軽い音と共に精霊は姿を消す。暫くして、玄関の扉が開けられた。

今度出てきたのもやはり精霊。こちらは人間と殆んど変わらない美女である。

リビングに通されると、ソファには初老の男が座っていた。
「久しいな、リオン」

「ええ、イライアス様もお元気そうで何よりです」

深く頭を垂れ、上位の者への礼を施す。顔を上げるとリオンは男の向かいの席に腰を下ろした。

「夜遅くにすみませんね」

「いや、構わんが……何かあったのか？」

穏やかな表情で、イライアスはリオンを見る。そつと顎に蓄えた髭を撫で、深くソファに背を預けた。

「何か、というわけではないのですが。ウォルトのことです」

「ああ。あやつめ、もう半年以上も顔を見せん。どうだ、元気にしているか？」

苦々しげな口調とは裏腹に、イライアスは元々穏やかな双眸を更に綻ばせた。

「ええ。休む暇もなく戦地を飛び回っておりますが……」

「そうか。今度帰ってきたら、体調には気をつけるよう言っておいてくれ。あと、せめて年が明けたら顔を出せ、ともな」

「はい」

王城での悪意に慣れてしまった身に、イライアスの優しさは嬉しかった。ホツとして、リオンの口元に自然と笑みが浮かぶ。

しかしすぐに表情を引き締め、膝の上に乗せた拳を握る。

「今日は、お願いがあつて参りました」

引き締まった背すじが美しく伸ばされる。

「ウォルトに暇をくれるよう、イライアス様から頼んでほしいのです」

イライアスは優秀な魔術師だ。

魔力の殆んどないリオンや魔法の使えないウォルトとは違い、宮廷でも上等の立場を築いている。

イライアスの言であれば、考慮してもらえるのではないか。微かな期待を抱き、縋る。

「リオンは……ウォルトを戦場に出したくないのだな」

イライアスは席を立ち、窓際に立った。背を向けてしまったため

リオンから表情を窺い知ることとはできない。

「ウォルトは確かに強い。そうはいない人材です。ですが、当人はできることなら戦になど出たくないと思っている」

「……そうであるうな」

低い呟きが、窓ガラスを白く曇らせる。

「名誉にも褒章にも興味が無いのだからな。城仕えには向いておらんのだろう」

リオンを振り返ったイライアスは、暗い面持ちで窓に背を預けた。「そろそろ、潮時かも知れんな……」

「イライアス様？」

「一人息子が魔術師でない以上、ラヴェール家は私の代で終わりだ。いや、本来ならもう、終わっているはずだったのだ」

リオンは思わずといったようにソファから腰を浮かし、怪訝そうにイライアスの顔を見つめる。

それに気付いて、イライアスは困ったように微笑んだ。

「貴族社会は異端に厳しいからな。ウォルトの体質が公になった時点で、私も城を追われる予定だった」

ゆったりとした口調。悲哀が混じったその声に、だが沈痛さは感じられない。

「しかし、ハーデス殿より条件を持ちかけられたのだ。ウォルトを傭兵として城に差し出せば、我々の身分を保証してくださるとな」

「ウォルトはそのことを知っているのですか？」

「だからこそ、あやつは文句も言わずに戦場に立つ」

沈黙が緩やかに流れる。リオンが浮かしかけた腰をソファに戻した微かな音が、二人の耳にはっきりと届いた。

「分かった。ウォルトが次に帰ってきたときに、ハーデス殿に話を通しに行こう」

ようやく口を開いたのはイライアスだった。

「……よろしいのですか？」

「この地位にも家名にも、もう未練はない。犠牲を強いるくらいな

らば、隠居生活も悪いものではないだろう」

未練がない、なんて嘘もいいところだ。リオンは思った。

ならば何故悲しそうな顔をしているのだ。振り切れるのならもつとさっぱりとした表情をすればいいものを。

「ウォルトが養ってくれますよ。あれで、職人として成功しているのですからね」

殊更にリオンは明るい声を出した。このまま湿った空気になるのには耐えられない。今更取り消してほしいなどと、言える筈もないのだから。

イライアスと別れて、リオンは離れへと向かった。

久しぶりの我が家、夫と子どもが待つ家だ。

ラヴェール家が没落すれば、家令である夫も職を失うことになる。リオンの後見はイライアスだが、今後立場はどうなるだろう。

離れの扉を開けると、明るい灯が点る。

中に入って扉の閉まる音を響かせると、タタタツと軽い足音が近付いてくる。

「おかーさんだー！ おとーさんっ、おかーさん帰ってきたよ！」

リオンの腰までしか背丈のない少年が、リオンに飛びつく。部屋の奥に向かってかける声は明るく澄んでいる。

「ただいま、イリヤ」

腰に抱きつく少年の頭を撫で、もう一つ近付いてくる足音の方にリオンは視線を向けた。そこにいたのは線の細い虚弱そうな男である。

「おかえり、リオン」

「ああ、ただいま」

お互いに柔らかく微笑み、穏やかな空気が流れる。
が。

「元気だった？ ちゃんとご飯食べてる？ なんか変わったことな

い？ 怪我とかしてない？ ていうか宿舎の男どもに言い寄られてないかもうち心配で心配でもう気になっ」

「ハハハハ、相変わらずウザいなアズベル」

矢継ぎ早に繰り出される質問。リオンには答える暇もないのだが、アズベルは勝手に取り乱している。

「こうじゃないとやっぱりおとーさんじゃないでしょ」

「確かに」

鬱陶しいと言いながらも、そうでなければ落ち着かない。イリヤの言葉に頷く。

「だってだって剣士隊の宿舎って言ったら男ばかりなんだよりオンは女の人だし綺麗なんだから気をつけないと危ないって」

「分かった分かった」

適当に頷きながら、リオンは部屋に向かった。まともに相手していたら、玄関に立ったまま朝を迎えてしまう。

本当に悩んでいるのが馬鹿らしくなる配偶者である。

どのような状況下においても、きっと彼は変わらない。自信を持って言いきれぬ。

同じように、何があってもこの幸せは変わらないのだ。それならば、悩む必要などないではないか。

そして、玄関の灯は部屋へと移動していった。

10話 点る灯（後書き）

今回から二章ですが、随分間が空いてしまいました。
イライアスとの会話が全然進みませんで…。
二章ではリオンを中心に話が進んでいきます。

11話 壊す風

家族と別れリオンが兵舎に戻った時、既に日は天高く上りツタの絡みついた建物を照らし出していた。

二階の角にある自室に帰ったりリオンは、机の上の書類を確認する。「外泊届け、か。今日は随分多いな」

常ならば1日に出される外泊届けなど片手で数えても指が余るほどだというのに、昨晩から今までで既に10枚以上の届けが出されている。

確認する限りは皆、昨日から休日の者ばかりで、仕事上の問題は何もない。

「何かイベントごとでもあるのか？」

ぞんざいに頭を掻く手が動くたびに長い金髪が波打つ。

疑問を抱きながらも、机の引き出しから確認用の印を取り出した。皆が帰ってきてから聞けばいいだけのことだ。

印に朱肉をつけ、書類に押そうとしたその時。

「シャマイン殿、いらっしやいますか？」

扉を叩く乾いた音、そして優雅なテノールがそれに続く。

聞き覚えのあるその声に、リオンは慌てて部屋の扉を開け、客人を招き入れた。

「ハーデス様！ ご用でしたらこちらから伺いますのに……」

歩を進めるたびに揺れる銀の髪、腰に差した長剣に添える手さえも優美で、古びた宿舍が急に華やぐ。

冷たい印象を与える相貌を柔らかく細め、皇帝の側近アルト・ハーデスは儀礼的に一礼した。

「公にしたくないお話ですのぞ」

リオンが椅子を勧めるのを手を挙げるだけで辞退する。その肩には彼の精霊である赤い鳥が澄ましてとまっている。

側近は躊躇うように俯き、リオンを目で伺う。

暫くそれを繰り返した後、彼は重々しく口を開いた。

「カーク・ザフィケルが、ウォルト・ラヴェールに殺されました」

「っ!？」

リオンは机の上に置かれた書類に目をやる。そこには間違いなく、当のザフィケルによる外泊届けが置かれている。

「……何を馬鹿な。ウォルトは昨日の朝、任務で旅立ったはず。それが何故、ザフィケルを殺せるのです？」

届けが出されたのは、昨晚リオンが仕事を終え宿舎を出てからだ。「ウォルト・ラヴェールが謀反を企てている」という情報が入りましてね」

否定するリオンに対し、落ち着いた様子でハーデスは続ける。

「真偽の程を確かめようと、ザフィケル殿をお借りしたのです。転移装置を使えばすぐですから。そこで、ザフィケル殿が殺された……

……これが何を意味するか、お分かりですね？」

「全く分かりませんね」

きっぱりと否定する。ザフィケルの外泊届けを机に戻し、ハーデスに向かい合うリオンは憮然として腰に片手を当てた。

リオンの返答にハーデスは微かに眉をひそめたが、すぐに穏やかな笑みを取り繕う。

「おや、シャマイン殿は賢い女性だと思っていたのですが」

「貴方が私にどのような回答を求めているのかは承知しております。ですが、それに合わせなければならぬ理由もありますまい」

上品な口調に含まれる明らかな侮蔑も気に留めず、リオンは笑って見せる。鋭く細められた瞳は挑戦的で、主張を曲げない強かさを全身から発していた。

「これが、見も知らない他人であれば、貴方の求める答えと同じものを私も出していたでしょう。ですが、対象がウォルトならば話は別です」

師としての弟子への信頼感、ウォルト・ラヴェールという一個人を誰よりも知るからこそその確信、そして

「奴には私を敵に回すような度胸はありませんからね」

彼が自分に対して抱く畏怖への自信。

言い切るリオンに、ハーデスは声をあげて笑い始めた。

「ハハハ。私に言わせれば、貴女のその発言は、貴女が謀反人に付くという意味に聞こえますけれど」

「そのようなつもりはございません」

お互いに合わせた視線は油断なく、それでも表面上は皇帝側近と剣士隊長の体裁を保っている。

先に目元を和らげたのはハーデスだった。

肩にとまる鳥のくちばしを撫で、クスリと微笑む。

「貴女が彼を信じるというのでしたら、それでも構いませんよ」

鳥に対してハーデスは親愛の表情を向けている。リオンに軽く視線を向けるその目は、己が優位に立っていることを分かっているのかもしれない。

「ただ、疑いは晴らされなければなりません」

そういうことが、とばかりにリオンは鼻を鳴らす。

「それで、私にどうしろと仰るのでしょうか？」

「アナト帝国13代皇帝、アザゼル7世皇の勅旨をお伝えします。

ウォルト・ラヴェールを確保し、セラフィムへ連行せよ」

命ぜられた内容にリオンは口元を歪めた。予想していた内容に違いはない。だが、勅旨の形式を取っているとは予想し得なかったことだった。

「ラヴェール家のご長男が類稀なる豪傑であることは周知の事実。

並大抵のものでは齒が立ちません。ですが、貴女であれば……彼も大人しく従うでしょう」

「抵抗された場合は？」

「その場で斬り捨てて結構です」

「どちらにせよ処刑するだけだから、ですか？」

油断なく探りを入れる目つき、それははっきりと、苦々しげに口元をゆがめるハーデスを見つけた。

不意に訪れる奇妙な沈黙。流れるのは気まずさではなく、探りあいで張り詰めた緊張。

ふう、と溜息が漏れる。苛立たしげに前髪をかき上げるリオンの眉がきつく寄せられた。

「その命令を受ければ、私はイライアス様に恩を仇で返すことになります」

沈黙の末に出した結論は、穏やかな声音でありながら重く室内に落ちる。

冷たく細められたハーデスの目を見てリオンは喉の奥で笑った。

「私には、私なりの優先順位がありますゆえ」

リオン・シャマインは時に自己中心的と評されることがある。

常に己の信じるものの為に突き進む。

その中に負い目や躊躇など欠片もなく、その堂々とした姿こそが剣士たちの憧憬の対象となる。

事実上の離反を口にしたそのときですら、彼女は窓から差し込む光の中に力強く立っていた。

忌々しいとばかりにハーデスは口元を歪めた。

「ならば……」

ハーデスの鳥が翼を広げて人の形を成すのと、リオンが机に立ってかけた剣を手取るのは同時。

「消えてもらわなければなりません」

赤い風が破壊音を奏でた。

11話 壊す風（後書き）

お久しぶりです。

更新再開いたします。

12話 悲し問（前書き）

お久しぶりです。

黒翼の更新を再開させていただきます。

12話 悲し問

しなやかな足を伝う血液は土に染み込んで消える。

リオンは宿舎の陰に立ち尽くす樹木にもたれかかった。己の荒い呼吸を耳障りに思いながら、体中に降りかかる木屑を取り払う。

赤風の放った攻撃は、宿舎の壁を吹き飛ばしてしまった。そうしてなくなった壁から外に出られたのだから、都合がよかったと言えなくもない。

そうでなければこの程度の傷ではすまなかった、とリオンは血の流れる腰を手で押さえた。

「力を存分に使えるだけ黒翼より上か」

思い浮かべるのは愛弟子が連れている精霊の姿である。最も身近にいる精霊であると同時にハーデスの連れている鳥、赤風と同じ一族なのだから、比較しやすい。

ふと、こちらに近づく足音に気付き、リオンは寄りかかっていた木から背を浮かせてた。

「リオン！」

走ってきたのは背が高く体格のいい男。片手に掲げる剣は体格に合わせて巨大である。

「一体何が……」

「来るな！」

問う声を厳しく遮り、近づく相手に切っ先を向ける。

空気を切り裂くような烈しい声に、ビクリと男の動きが止まる。

男は剣士隊の副長。リオンにとっては片腕とも言える部下だ。

「選ばせてやろう、バース。お前の忠誠を、この先誰に捧げるかを」
「……」

一瞬怪訝そうに間の抜けた表情になったバースだが、すぐにその表情は驚愕に、そして鋭いものへと変化する。

「選べ。皇帝陛下と、私と。もし、私を選ぶのなら……」

真っ直ぐな言葉は、片腕で、仲間で、親友の男を悲嘆に暮れさせた。

「失敗したかな」

あらゆる選択を。

リオンは一人、城の裏門へと移動していた。

人ができるだけ近付かない場所。そして、ハーデスが外へ向かうとしたらそこを通ることを見越して。

自分と弟子の家族を巻き込ませるわけにはいかない。

反逆はリオン自身が決めた、リオン自身の責なのだから。

それさえなければ、こんな心配もいらなかっただろう。

選ばなければ、一つの犠牲で全ては終わった。それでも。

「後悔なんてするわけないだろう？」

自分自身に言い聞かせ、リオンは不敵に笑みを浮かべた。

（私は私が思うままに行動しているのだから）

「例えその先には死しかないとしても？」

問う声は美しく耳障りなテノール。

追いついてきた男は隣に赤い髪の子を従えていた。白い翼、本体は赤い鳥の精霊を。

肯定の笑みを浮かべ、リオンは剣を構えた。

視線が交わった次の瞬間、打ち合わされる刃と刃。

間合いを詰めたリオンに反応して、ハーデスも剣を抜き斬撃を受け止めた。

予想できる攻撃であったとは言え、並みの剣士であれば既に切り伏せられているはずだった。

アルト・ハーデスは有能な魔術師であると同時に、有能な剣士でもあるのだ。

受け止められることも予想の範疇内だったのであろう。すぐにリ

オンは体勢を整えて次の攻撃を繰り出す。

縦に横に、上段から下段から、休むことなく繰り出される鋭い斬撃に制止をかけたのは赤い髪の子が放ったかまいたちだった。

突然の横からの攻撃、かろうじてかわしたもののリオンはバランスを崩し膝をつく。

その隙についてハーデスが頭上に剣を振り下ろすが、ギリギリでそれを受け止める。

そのまま力を込められれば、体勢の分が悪く、更に先程腹部に受けた傷が痛みを訴えてくる。しかも元々女であるが為に劣っているリオンの腕力では競り負けるのは時間の問題。

それにこのままでは次の精霊の攻撃を受け止めることもかわすこともできない。

両手で支えていた剣から左手を外す。その左手で地面を叩くようにして体を切っ先から逃れさせる。

再び間合いをあげ、体勢を整える。

そこでハーデスは静かに口を開いた。

「愚かですね。リオン・シャマイン。貴女が死んでもウォルト・ラヴェールの追尾は終わらないというのに」

「どうとでも言うてくださって結構です。私の自己満足な我侭ですゆえ。私は意に副わぬ屈服の生を受けるくらいならば、反抗の死を選ぶ」

「プライドの為ですか。それは」

「いけませんか」

「いいえ。だからこそ、貴女は剣士隊の隊長なのでしょう」

ハーデスは剣を正段に掲げた。

「愚かな剣士隊長殿に敬意を表して。イブニングには手出しさせないように致しましょう」

どこまでも自身の優位を確信しているのであろう。口元には笑みを浮かべ、精霊を再び鳥の姿に戻す彼は余裕に溢れている。

「赤風なしで、とは随分と自信がおりようで」

「イブニングの力を借りずとも、手負いの剣士を斬り伏せるくらい大したことはありませんから」

両者は同時に地を蹴る。

お互いの渾身の一撃が交錯した。

12話 悲し問（後書き）

会話と戦闘のつながかたに予想以上に挺子摺ってしまいました。

13話 其の意

鋭い刃鳴りが響く。

何十号も打ち合い鳴らされる剣は未だにどちらにも傷をつけていない。

二人の顔には既に笑みなど欠片も残ってはいない。きつい眼差しは刃を、そして互いを睨みつける。

リオンの剣がハーデスの髪を一筋散らす。

ハーデスの剣がリオンの肩当てに傷を刻む。

両者の剣技は拮抗しているように思われた。

だが、剣を専門に取扱う者と魔術を行うものの差か、それとも実戦経験の差か。

僅かにリオンが優位に立った。

ハーデスが受けに回り始め、そしてついに、決定的な一打が打ち下ろされようとしていた。

だが。

「!？」

ふいにリオンが身を引いた。十分に間合いをあけてから、自身の目に触れる。

今、ハーデスが歪んで。

「視界が揺らぎ始めましたか？」

「何を」

「腹部からそれだけの血を流したまま戦い続ければ仕方ないことでしょう」

確かに、傷口は開き、止まりかけていた血液は再び流れている。

眩暈がしてもおかしくはない。

（いや、違う！）

揺らいで見たのはハーデスだけ。今は既に収まっているし、剣も景色も何一つ不自然には映らない。

何かがおかしい。そうは思うものの、何かおかしいのか分からなかった。

考える間もなく、ハーデスが間合いを詰め下段から斬り上げてくる。

縦に構えた剣でそれを防ぐと、即座に離れて斬り返す。

分らないのならば、分かるまで試せばいいのだ。先程のが間違っていたのならそれでも構わない。

再び斬りつける斬撃は甘く、一歩後ろに下がるだけで簡単にかわせるもの。

反撃しやすいようにとハーデスが受けずに避ける、それにつけ入る。

それを追って一歩踏み込んで刃を返す。

今度は鋭く、早い。

突然の緩急についていけず、ハーデスは僅かに体勢を崩した。

その隙を見逃さず、更に斬り込む。

（やっぱり、また……！）

先程と同じように、やはりハーデスの姿がぶれ、霞んで見える。

それにも構わず、リオンは感覚に従って剣を振り下ろした。

だが。

ハーデスの姿が突然に消え、手に伝わるのは空気を切り裂く感覚のみ。

まずい、と本能が告げる。

その声に従い、体を捻りながら左へと飛ぶ。

「くっ」

体勢を崩して地に倒れるが、反動を利用してすぐに起き上がる。かわしきれずに斬りつけられた右肩から腕へと血が伝う。

「その状態でよくもちますね。今度こそ終わりと思ったのですが」

「ご冗談を。せっかく仕掛けが分かったのに、こんな所で終われませんかよ」

立ち上がり、肩の状態を確かめる。

防具のお陰もあって、傷はそんなに深くはない。万全の状態で、
というわけには行かないが、まだ剣を扱える。

「仕掛けなど、作った覚えはありませんけれどね」

「次で、証明して見せますよ」

言葉と、剣戟は同時だった。

刃と刃のぶつかり合う際、肩が激痛を訴える。動きが自然と鈍くなる、その瞬間顔面を狙って突きが襲ってくる。

背を反らして避け、リオンは太腿に巻いてあるバンドからナイフを取り出しハーデスに投げつけた。

ハーデスがかわしたところに二度目の投擲。

その間にリオンは体勢を立て直し、切りつける。

それは防がれたが、三度目、最後のナイフを投げることによってハーデスの体勢を崩す。

その時に、やはりまたハーデスの姿が歪み、途切れ途切れにしか見えなくなる。

リオンは大きく腕を伸ばし、自身を中心に円を描くように剣を風ぐ、

剣は歪んで見えるハーデスを通り過ぎ、リオンの隣で硬質な音を立てた。

そのまますぐに剣を引いて蹴りを足元に繰り出し、再び斬りつける。

そして切っ先に確かに伝わる手応え。

ハーデスの胸部に一文字に傷が刻まれる。

しかし、それはまだ随分と浅い。追い討ちをかけるべく、更にリオンは踏み込む。

だが、多すぎる出血は確実にリオンの手足の感覚を奪っていた。もし万全であったのなら、ここで確実にハーデスを打ち取ることができただろうが、ハーデスが離れる方が幾分早かった。

「……証明の続きの、答え合わせを致しましょうか」

十分にお互いの距離を空けてから、自身の傷を一瞥しハーデスは

口を開いた。

淡々とした口調ではあるが、傷を負わされたことに対し驚いているのは確かだ。

リオンは乱れた息を整え、ハーデスを見据える。

「思い出したんです。貴方が、いかにして皇帝陛下の側近にまで成り上がったかを」

家柄も勿論ある。代々優秀な魔術師を輩出し城に仕えてきた名家だ。

だが、地位に見合うだけの能力のない者を国のトップにおくはならない。

「貴方の守るものは、未だかつて全で一筋の傷もつけられたことがない。私は今までそれを、それだけ強い方だからだと解釈しておりました」

「今は違うと？」

「誰も傷つけることができないようにすることができから、でしょう。魔法で光を捻じ曲げて、本来存在するのとはずれた位置

に対象物を映し出して」

虚を突かれたように目を見開いたハーデスだったが、すぐにいっと唇を釣り上げた。

「さすがは、剣士隊長殿」

「なっ……」

ハーデスが言い終わるよりも先に、リオンの胸は背後から光の槍に貫かれていた。

「ぐ、あ……」

ズシャ、と重い音を立ててリオンの体が地に崩れ落ちる。

「紹介しましょう。金光のサンライズ。最高位の翼の一族です」

倒れ伏すリオンの前に、ハーデスと精霊が立つ。気力だけでリオンはそれを見上げた。

緩やかに波打つ金の髪、他のどの精霊よりも白く輝く翼。

「貴女の回答は殆んど正解ですよ。ただし、致命的な間違いが一つ。

術が私の魔法だと思い込んだこと……」

ハーデスは常に赤い精霊イブニングを連れている。他の精霊を従えている姿は、誰も見たことがない。それこそが畏だったのだ。

ハーデスほどの魔術師ならば複数の精霊を連れていない方が不自然だというのに。

常に連れている一人が翼の一族だということが、それを不自然に思わせなかった。

「この私に傷をつけることができた褒美に。私の魔法で終わらせて上げましょう」

ハーデスが掌にエネルギーを集めるのを、リオンは自分でも意外なほどに冷静に見つめていた。

（無意味なものなど、何もないのだよ）

一昨日、弟子にそう語った。

その弟子は、今後どうするのだろうか。現在本当に謀反を起こしているとは思えないけれど。

そして。

（アズベル、イリヤ……。イライアス様……）

ハーデスの掌から放たれた光が、城の裏門を包み込んだ。

「そろそろリオン先生にも話がいつてるのかなー」

黒い翼の精霊が、傍らの主人に話しかける。

「そうだな、『貴女の弟子が謀反をおこしましたよ』とか？」

「なんか間抜けな報告だね」

砂地を踏む主人の声は存外に軽い。

精霊は主人が普段と何も変わらずにいることに安堵する。

「まあ、許せなかったらその時は直接殴り飛ばしに来てくれるだろうし」

話なんかいつでもできるよ、と。白い髪を揺らしてウォルトは笑った。

「だから、先生が来るまで生きて逃げ延びないとね」

13話 其の意（後書き）

短いですが、ここで2章終了です。

この回が今後意味あるものとなるよう、今後も鋭意努力していきたいと思います。

14話 誘拐事件（前書き）

今回から3章になります。

今しばらくお付き合いください。

14話 誘拐事件

ウォルトが謀反人の汚名を着せられ追われる身になってから、一ヶ月が過ぎた。

紅葉も散り、冬が訪れようとしている。

この一ヶ月、ウォルトは森の中を迂回しながら西を目指している。本来の任務で向かう予定だったのも西である。

アナト帝国は東西南北、そして中央の5地方に分けることができる。各地方には諸侯があり、地域内の領主たちを取りまとめていた。西方には魔力の弱い者が集っていることもあり、各地で反乱の気運が高まっていた。

国を追われたからと言って反乱軍に加わるつもりはないが、追手に捕まる可能性は格段に低くなる。

そして今。ウォルトは西地方の最北端にいる。

辺境に位置するこの町は、恐らく直轄の領主にとっても手が回らない……いや、回す余裕がないのだろう。取り繕うこともなく荒れ果てた姿を晒していた。

割れた石畳から飛び出ている雑草を避けつつ、ウォルトは周囲を見回した。

崩れた建物は放置され、開いている商店ですら傾きかけている。しかもその商店に並んでいる品の量は微々たるもの。

人影はまばらで、見当たる人と言ったら道端に座り込む母子、ボロを着て歩く男。後は恐らく家の中にもいるのだろう。

「前に来たときより随分酷くなってるな」

肩にかついだ荷物を持ち直しながら、誰にともなく呟く。

普段ならすぐに応える声が、今はない。ウォルトの傍らには黒い鳥の姿も、黒髪の麗人の姿も見えなかった。

白髪高身長 of 青年も、黒髪黒目の精霊も、人前には目立ちすぎる。

その為ウォルトはローブのフードを目深く被って顔を隠し、レンは臨時の依代で眠っている。

ウォルトはそっと、腰に括りつけた巾着に触れた。

手に伝わるのは、中に入った直径3センチほどの球体。硬質な石、レンはその中にいた。

精霊は元々精神体であり、通常は人の目に見えない。

彼らは人に認識されることによって実体を手に入れることができるのだが、体という器に護られない魂は傷つきやすく、壊れやすい。だからこそ、精霊は己を見つけ出してくれる主人を求める。

しかし、そうかと言って主人を得た精霊が常に実体化しているかというとそうではない。

魔力を使いすぎて休まなければならないとき、人目についてはいけない時。

己の力で作る実体には宿れない。しかし長時間精神体のままでいるにも命をすり減らす危険性がある。

そんな時に使うのが依代である。精神と波長の合う物質を体の代わりとするのだ。

魔力供給が存分になされていれば、1日や2日依代に頼らなくても全く心配はいらないが、レンは休む時には大概依代である黒の宝玉に宿っていた。

「これじゃあ買い物は諦めた方がいいかもしれないな」

買うどころか、町の人間が食べる食料すら十分にはないのではないのか。そんな中買い込んでいくわけにはいかないだろう。

「まあ屋根のあるところで寝られさえすればいいけどね」

幸い、前回訪れた町で買った非常食にはまだ余裕がある。

今までは人目につかないようにと森の中を通ってきたのだ。町に入るのすら10日ぶり、宿に泊まったのは既に20日以上も前になる。

食料よりも暖かな寝床。

それが今ウォルトにとって最重要事項なのだった。

そんなことを考えながら、町並みを見回したとき。

どん、と、左腕に衝撃を受ける。

振り返ると、背の低い男がこちらに向かって会釈した。

「すみませんね」

「あ、いやこちらこそ」

余所見をしていたせいで、向かい側から走ってきたこの男とぶつかってしまったのだと気付く。

こちらの返事を最後まで聞かずに男は走り去って行った。

よっぽど急いでいたのだろうか。こんな人通りの少ないところですら勢い余ってぶつかってしまうほどのだから。

疑問に感じつつ、ウォルトは再び歩を進めようと足を踏み出すが。

「……」

何か違和感を感じる。

おかしい。何かがおかしい。

何か足りないような気がする。

首を傾げながらも一步、二歩と歩みを進め、そして気付く。

先程まで大腿に当たっていた感触がないことに。

「……へ？」

普段の冷静さはどこへやら。慌ててロープの下に手を突っ込み、腰に括っていた巾着を探る。

しかし、どれだけ手を動かし確認しても、そこにあるのは自分の腰と足のみ。巾着など影も形もない。位置がずれたということもないようだ。

そしてその巾着の中身といえば。

「レンー?!」

ようやくその現実を脳が受け入れたとき、ウォルトは裏返った声で精霊の名を叫んでいた。

慌てて荷物をひっくり返す。

落としたのかもと路地を確認する。

見つからない。ということは。

やはり先程ぶつかった男にすられたとしか考えられない。

「迂闊だった！」

踵を返し、ウォルトは男が去っていった方に向かって全速力で走り出した。

石はそれだけでも価値のあるものだ。

精霊が宿っているのなら、更に値段は跳ね上がる。

急がなければ売り飛ばされてしまうかもしれない。

レンが異変に気付くかどうかというと、石の中で寝ている以上ほぼ気付かない。

気付いたとしても逃げられるかどうか。

「精神体でこつちまで戻ってくれば……いや危険すぎるか！」

並んだ建物の隙間から裏路地に入る。

表通りをずっと逃げているとは思えないから、探すのなら裏道だ。

「魔力を出せさえすればどこにいるか分かるのに……っうわ！」

悲鳴をあげたのは瓦礫に足を取られ転びそうになったからだ。

慌てて体勢を立て直し、更に走る。積まれたゴミを蹴倒したのはご愛嬌だろう。

走っているうちに被っていたフードは脱げていたが、ウォルトにはそんなことを気にしている余裕など既になかった。

15話 召喚作戦

狭い路地の奥に、その倉庫は佇んでいた。

木造の建物には窓がなく、継ぎ目から差し込む日差しだけが唯一の光源だった。

それでもところどころ木目が削れている為か、現在のように天気がよければ十分な明かりを確保できる。

ふいに室内の明るさが増す。室内に照らし出されるのはスキンヘッドと長髪の男。

そこに更に小柄な男が入ってきて、彼が扉を閉ざすと室内は再び元の暗さを取り戻した。

室内に入ってきた男は手に持った巾着を掲げ、ニヤリと笑む。

「その調子だと収穫あつたみたいだな」

長髪が男に声をかける。

「ボーっと歩いてやがってから簡単でしたぜ」

巾着を持った小柄な男は弾んだ声でそれに応えて、部屋の中央に置かれたテーブルに歩み寄る。

「で、中身はなんだ？ それでただの小銭入ってこたねえだろうな」

スキンヘッドは身を乗り出すようにして、小柄な男が持ってきた巾着を覗き込んだ。

「この感触は小銭ってこたあありやせんよ」

小柄な男は巾着の紐を緩めると、掌の上でそれを逆さまにした。転がり出てきたのは黒く、そして綺麗な球形の石。

長髪の男がそれを受け取り、外から入る明かりに向けてかざして見せる。黒い石は明かりの中ほんのり赤みがかって光った。

「こりゃあ、宝石か？」

「黒真珠だな」

スキンヘッドの問いに長髪が答える。

「だけどこのでかさと完璧な球体はまず有り得ねえぞ」

感嘆の溜息をつき、大事そうにテーブルの上に置く。

「いい値で売れそうか？」

「いい値なんてもんじゃない。これを買える奴を探す方が大変だ」

「今ギルんとこに泊まってる貴族なら買えるんじゃないですかね」

男たちはそれぞれ黒真珠を金にするための算段を巡らせていた。

そんななか、長髪の男はたと気付いたように再び宝石を手にとった。

「どうした？」

「いや、これまさか、中に精霊が入ってるんじゃないかと思ってな調べるように掌の上で転がし、かざしてみる。見た目では特に分らない。」

「こんなでかい宝石を小汚い巾着に入れて持ち歩くんて不自然だろ。依代なら納得がいく」

「それが本当だったらついてますぜ。1年くらいは余裕で食ってけらあ！」

小柄な男が歓喜の声を上げる。

「まあ待て。これが本当に依代だって決まったわけじゃねえ。おい、お前から呼び出し方分かるか？」

スキンヘッドの問いに、残りの二人は顔を見合わせた。

この場にいる誰一人として精霊や魔術に関する知識を持ち合わせていない。

魔術師であれば中に入っている精霊の気配を感じ取ることができると言うが。

「普通に呼んでみりゃいいんじゃないですかね」

小柄な男が提案する。否定するにも肯定するにも材料がないのだ。今は色々試してみるより他なさそうだ。

「おい、精霊さんよー、いるんだったら出てきてくだせー」

「お願いしまーす」

「呼びかけに答えてくださーい」

まずは低姿勢。

テーブルの上に置いた依代を3人で覗き込み、口々に呼びかける。だが、石は変わらず鈍い光を放つのみで、何の反応も示さない。

「おい出て来い！ 出てこねえとひでえぞ！」

怒鳴ってみる。

しかしやはり変わらず。

「名前で呼んでみたらどうだ」

「こん中の精霊の名前なんて知ってんのか？」

「……知りません」

長髪の見解は不可能なので却下。

「叩いてみるか」

言うなりスキンヘッドは石を掴みテーブルに打ち付ける。

「だああっ待ってくだせえ！ 傷でもついたら石としてだけでも売れなくなっちまう！」

もう一度打ち付けようとしたところで小柄な男がテーブルとの間に手を差し込み、これ以上の打撃を阻止。

テーブルの身代わりとなった手の痛みにした打ち回ることになった男は恨みがましそうな目でスキンヘッドと石を見つめる。

「ていうかそんなことしたら、気付いても出てきてくんないんじゃないですか」

危険と分かっているわざわざ出てくる馬鹿もいないだろう。それがいくら精霊だとしても。

「じゃあどうしろってんだ」

「持ち主に聞いてみるとか……」

「馬鹿かお前、それじゃ取り返されちまうじゃねえか」

ただでさえ薄暗い室内が更に暗くなったかのような感覚を覚える。3人の男は悲嘆にくれ、誰ともなく溜息をついた。

「仕方ねえ、諦めるか……」

もしかしたら、本当はこの石の中に精霊なんていないのかもしれない。

この石だけでも十分な値打ち物じゃないか。

そんなことを考え、暗くなった気持ちを奮い立たせるようにスキンヘッドが笑おうとした。その時。

ドタドタと騒がしい足音が外から聞こえてきて、そして。

「お願いだからさっきの返してくださいー！！！」

今にも泣き出しそうな絶叫と共に、石の持ち主が飛び込んできた。

15話 召喚作戦（後書き）

彼らはいたって真面目なのです。

16話 返却要求

出入り口に立ったまま、ウォルトは肩で息をしていた。額から流れる汗が床に染みを作る。

荒い息を紡ぎながら、スキンヘッドの手に黒い宝石を見つける。それと同時に安堵の表情を浮かべた。

「お願いします。その、石……返してください」

唐突なことに呆然としていた男たちは、その声に我に返って身構えた。

「何言つてやがる。返せつて、これがめえのもんだつて保障がどこにある？」

「残念だが、こりゃあんたの探してるもんじゃないんじゃないか」
長髪と小柄な男がそれぞれ否定する。

3人の男たちはそれぞれ顔を見合わせて笑った。だが内心では極度に焦り、混乱していた。

何故持ち主がここへやってくるのだ。精霊の力を辿ってきたか、それとも誰かが情報を売り渡したのか。

「それじゃあ、確認させてください。そうしたら、違つかどうか分かりますから」

先程まで情けなくも泣きそうな顔をしていたウォルトだが、安堵と共に余裕が戻ってきたのだろう。

腕で流れる汗を拭うと真っ直ぐに男たちを見据えた。

「それはできねえな。確認するとか言つて触った途端持ち逃げする気だろう」

スキンヘッドの言に、ウォルトはムツとしたように眉を寄せる。自然目つきが鋭く睨むようになるが、意志の力でそれを抑え込むと困ったように笑った。

「何もただ返せつて言ってるわけじゃない。暢気に歩いてた俺にだつて問題はあるし、出来る限りの代価は払わせてもらいます」

ウォルトはいざとなったら実力行使で奪い返すことも出来る。だが、出来る限りは平和的に解決したいというのが本音だった。

精霊のような意思も思考力も人間並みにある生き物を金で遣り取りすることに抵抗を感じないわけではない。

だが、誘拐されたからには身代金を払ってでも返してもらいたいというのは人間として当然の感情だろう。

通常の精霊売買の相場からしたら微々たる代価しか払えないが、元々はウォルトのものなのだ。そこまで贅沢を言われる筋合いはない。

ゆつくりとした足取りで、倉庫の中に足を踏み入れる。

男たちが警戒し始めたところで足を止めた。

「お願いします」

精一杯の誠意を込めて、頭を下げる。

「そこまで必死になるのは、中に精霊が入ってるからか？」

長髪がウォルトに一步近付いた。

残りの2人が何か言おうとするのを手で制す。

顔を上げたウォルトは一度石に視線を向けると頷いた。

「なら、ちよつと呼び出してみてくれないか？」

「いいです、けど……」

これで呼び出せれば、石がウォルトのものであるという証明にもなるだろう。

ウォルトとしては助かるが、どういったつもりで男がそのような話を持ち出してきたのか分からず、怪訝そうに首を傾げた。

「そのの、テーブルに置いてください。握つてると危ないですから。

レン」

穏やかな声で呼びかける。

男たちの視線が石に向いた隙に、また一步テーブルに近付く。

「レン、起きて。大事な用事があるから」

何の変哲もない言葉だった。

呪文を唱えるわけでも、儀式をするわけでもない。言葉に魔力を

込めているとも思えない。

ただ普通に、優しく呼びかけるだけ。

だが、確かに変化はあった。

石が淡く発光した。と、思うとすぐに影のようなものが勢いよく石から飛び出す。

それは瞬く間に人の形を成していく。

空中に蹲っている背には鳥を思わせる黒い翼。

闇よりも深い黒だというのに、その翼から落ちる羽根は光り輝き、テーブルの上に落ちると共に消えた。

3人の男は現れた精霊に息を呑む。人形のように整った神秘的な面差しに感嘆の念を禁じえない。

ゆっくりと、精霊が閉じていた瞳を開き、テーブルの上に降り立った。

「……」

精霊は静かに辺りを見渡した。その姿にごくりと男たちが喉を鳴らす。

それからの数秒というものの、男たちはすっかり雰囲気飲まれてしまっていた。

だが。

「あれ、え?! 何、何事!?!」

急に精霊はパチリと目を見開いたかと思うと、慌てたようにきよるきよると視線を彷徨わせた。

「あー、やっぱり寝惚けてたんだね」

ポツリと主人が呟くのが男たちの耳に入る。

「寝惚けっ!?!」

「てことはさっきのあれは寝惚けてボーっとしてただけってことか!」

「んなもんに俺たちは神秘を感じてたつてのか?!」

余程シヨックだったのだろう。男たちは頭を抱えてテーブルに突っ伏してしまう。

呼び出されたレンはというと、戸惑った様子で頬を掻いていた。少し離れた位置に立っている主人。

すぐ近くで突っ伏している男たち。

そして自分が立っているのは何故かテーブルの上。

一体どういう状況なのか理解できない。

「……………ショータイム？」

このテーブルお立ち台代わりで。

そんなことを言っただけでポーズを取るものだから、ウォルトは耐え切れず嘔き出し、男たちは更なる精神的ダメージに打ちのめされた。

16話 返却要求（後書き）

ちよつと長くなりそうなので、一度区切らせていただきます。

17話 対価交渉

「レン、混乱しすぎだよ」

笑いすぎて目の端に浮かんだ涙を片手で拭いながら、ウォルトはレンに向かって手を差し出した。

訳が分からない、と言いたそうに眉を寄せていたレンはその手を見ると明るい笑顔を见せてテーブルを蹴る。

「うえあつ？」

しかし男たちの頭を飛び越えたところで足首をつかまれ、主人の側に辿りつくことは叶わない。空中ではバランスも取りにくく、抵抗らしい抵抗など殆んどできなかった。

「取引だ」

羽ばたく翼に当たらないよう横に回りこんだ長髪は、挑戦的に口元を歪めた。

「ちよつと……っ、何なんだよ、痛いんだけど！」

「うるせえ、静かにしてろ！」

抗議するレンを怒鳴りつけ、掴んだ足首を思い切りよく引つ張りテーブルに引き摺り下ろす。

自由の聞かない状態で働かれた無体に、レンは声に出さなかったものの顔を顰めて痛みを訴えた。

「あんたが必死なのは、この精霊を取り戻したいからだろっ？」

「……そうだけど」

答える声音には、静かながら確かな苛立ちが含まれていた。ウォルトの視線はレンの足首を掴む長髪の手に注がれている。

「なら、精霊は返してやる。代わりに依代をもらいたいんだが、どうだ？」

睨むように男の手を見ていたウォルトの眉が上がる。視線を長髪の男の顔にまで上げ、白い柔らかな髪をぞんざいにかき上げた。

「……何か、勘違いしているんじゃないか？」

口調からは既に丁寧さが抜けている。

「多分だけど、あんたたちが思ってるほどの値打ちはないよ。もつとも、通常の大きさの真珠くらいの値段にはなるだろうけど」

「何言ってやがんだ。これだけの宝石が……」

スキンヘッドが言い返しながら、テーブルの上に置かれたままの依代を手取る。

そうするとスキンヘッドは不自然に言葉を途切れさせた。
見る見るうちに表情は驚愕へと変化していく。

「軽い!？」

「指で強く摘めば簡単に潰れる。中はスカスカだからね」

言われたとおり石を摘み少し力を入れると、ピンポン玉のようにへしゃげてしまった。

「何しやがったお前!」

「何も。中にレンがいなきゃそれはただの張りぼてだっただけ」

そう、確かに値打ち物ではある。だが、見た目で想像するだけの価値には遠く及ばないのだ。

冷たく突き放すようにウォルトは告げ、男たちに近付く。レンの足を掴む長髪の手を乱暴に掴み上げた。

「つつ……」

緩んだ手から逃げ出したレンはすぐウォルトの背に隠れる。

「それでよければ対価にしてもいい」

「よくない!」

遮るような大声はレンのものだった。

「お爺さんがウォルトにくれたものなんだから、簡単にあげるとか言っちゃ駄目だよ」

子供を叱るような口調で窘められ、ウォルトは目を瞬かせてレンを見た。

すぐに浮かべる苦笑は、男たちに向けていたものより幾分幼く気が抜けたように見える。

「確かに、大事なものだけど。爺さんは多分怒らないよ」

「怒らなくても悲しむよ」

「……」

精霊を買い取る対価だ。しかも、ウォルトにとっては家族であり親友でもある存在の為に払う代償なのだ。

大事なものだから駄目、などと言えるほどレンの存在は安くない。じつと視線を合わせること数秒。先に折れたのはウォルトだった。肩に担いでいた荷物を下ろすと、その中から10枚一連となっている金貨の束を取り出した。

「……これで、勘弁してくれないか」

国から支給された資金が、思わぬところで役に立つ。

男たちに差し出しながら、ウォルトは小さく溜息をついた。

「多分、その依代を売るよりはマシだと思う」

驚いたのは男たちである。

いくら高位の精霊を連れている魔術師とはいえ、小汚いローブを纏った旅人にこの依代よりも高価なものが持ち歩けるはずがないと思っていたのだ。

だというのに、この年若いのに真っ白な頭をした男は何でもないことのように金貨を差し出してきた。

「い、いいのか？」

思わず確認したくもなるというものである。

「よくないよ。これで冬を越す資金がいつきに減った」

不機嫌に言い放つが、しかしだからと言って今後生活に困るかといえはそれはないと自信を持って言えた。

ウォルトはあくまで魔術具職人なのだ。自作の魔術具は幾つか持つてきているからそれを売ればなんとかなるだろう。

まだ信じられない様子で男は金貨を受け取り、依代をウォルトに手渡した。

「よかった……。ありがとう、ウォルト」

満面の笑みでレンが礼を言う。

理由は未だによく分からないものの、自分の為に代価を払ってく

れたことに。

そして、自分の望みを叶えて依代を手放さないでくれたことに。

「いいよ、元はといえば俺が……」

そう言っ、ウォルトがレンの頭を撫でようとした時である。

外から硝子の割れる音と怒声、悲鳴が飛び込んできた。

18話 身元発覚

倉庫の中にいる5人は驚愕と警戒に緩みかけた意識を張り詰めさせ、音の聞こえてきた方向を勢いよく振り返った。

閉めきられた倉庫の中である為、外の様子を見ることはできない。代わりにと耳を澄ませると、言い争う声と馬蹄、人の走る足音が聞こえてくる。

ウォルトは踵を返すと同時に走り出し、出入り口の扉を開け放った。

「いい加減にしろ！ この町には今あんたたちに出せるものなんかないんだ！」

「いい加減にしろはこっちの台詞だ。義務を果たしやあこんなことさつさと出てってやる」

「だからそれはもう少し待つって話だったじゃあないか！」

遮るものがなくなった為に、はっきりと聞き取れる音量で会話が耳に飛び込んでくる。

言い争っている声は少女と男のものようだった。

「前の領主はそう言ったかもしれないがな、この地は今私のものだ。前領主がした約束を守る必要などあるまいて」

見ればこてこてと装飾品で飾られた服を着た中年の男が、周囲に数人の護衛を引き連れて少女と対峙していた。

少女の後ろには、町人たちが5人ほど並んでいる。

彼らの周りには、先程の音の原因と思われる木片と木箱、硝子の破片が転がっていた。

「……もしかして、今この町の権利者って国なのか？」

口元に手を当てて、ウォルトは考えていた。

領主は各町から集めた税金の中から定められた額の税を国に納めることになっている。

しかし、だ。

恐らく、この領主は税を納めることができなかったのではないか。その為、代わりにこの町が国に差し出された……男の言葉からの推測だが、大方合っていると見て間違いない。

「困ったなあ。あんまり城と繋がりが強い人には会いたくないんだけど」

「そんなこと言ってる場合じゃないんじゃないかな？」

ウォルトの後ろから顔を出したレンは、騒ぎの現場を指差した。それにつられて考え事に傾いていた意識を渦中に戻す。考えている間に、随分と口論はヒートアップしてしまっていた。

「国から恩恵を授かっておきながら、払うべきものを払わんなどということがまかり通ると思うか！」

「いつお国が恩恵なんか与えてくれたってんだ！ 国はあたしから奪うばかりじゃないか！」

少女は今にも掴みかかりそうな剣幕で怒鳴っているし、男の周囲では護衛たちが魔法具を掲げ、更には精霊までも喚び出していつでも攻撃できる準備を整えている。

乱闘にでもなれば、よほど巧みな戦い方でもしない限り町人の側に死者が出る。

仮に町人が勝ったとしても、報復でこの町は滅びる。

「本当に、困ったところに来たもんだ。……レンは、ここで待ってね」

溜息混じりに呟くと、ウォルトはローブのフードを被った。

「おい、あんた。どうするつもりだ？」

倉庫の奥から、スキンヘッドの男が戸惑いの多分に含まれる声をかけてきた。

「あんまり荒っぽいことにはしたくないからね。平和的解決の提案に」

一度スキンヘッドを振り返ると、ウォルトは騒ぎの中へと足を踏み出した。

どうせすぐに出て行く町、自分には関係ないこと。そう言って無視することもできる。恐らくそれが賢い選択というもののだろう。だが、運悪くもこの場に居合わせてしまったのだ。このままにしておくことで発生する不幸まで、予想できてしまったのだ。

何もせず放っておくには、寝覚めが悪すぎる。

「あー、双方とも、少し落ち着いて。話し合いましょう?」

一斉にその場の全員の視線がウォルトに集中する。鋭いそれに少々たじろいだものの、両手を顔の高さにまで上げて害意がないことを示す。

「何だお前は!」

「しがないただの旅人です」

「余所者が口を出すな!」

男からの鋭い声にのんびりと応じる。すると今度は少女からの怒声。

いやごもつとも、と言いたいのを抑えてウォルトは微かに苦笑を洩らした。

「このまま争っては死者が出ます。それを見るのは忍びない。故にこうしてしゃしゃり出てきたというわけで……」

場は極度の緊張状態にある。それを和らげるようにとウォルトは穏やかな口調を崩さない。

ウォルトは男へと向き直った。護衛の魔術師たちが警戒して身構える。

「ご覧の通り、この町は今貧困の中にある。それこそ、住民が生活するにも困る程に」

掌を上に向けた右腕を左から右へと動かす。この通りだから、周囲を見てみると促すように。

盗人が出るのもこれでは当たり前だ、と視線を倉庫へと移す。視線を元の通り男と少女に戻す。

少女はウォルトの言い様に不満そうではあったが、事実である為に黙っているより他なかった。

「自分たちが必要なものすら足りていないのに、そこから更に搾取されたらこの町の人たちは生きていけませんよ」

「だからなんだというのだ？」

「はい？」

冷たく切り捨てられ、ウォルトは反射的に不機嫌な声を出してしまった。

自分でも予想外に棘の含まれた声が耳に届き、しまったと唇を噛む。

仕切りなおさなくては、そう思って深く息を吸い心を落ち着ける。

「だからせめて、少し余裕ができるまで待つてほしいと……」

「関係ない。このような辺境の町、国に奉仕させる以外の価値などあるまい。物が無いのなら人間を間引けばいい」

ぽかん、とウォルトは間の抜けた顔をした。開いた口が塞がらない。

この男は本気でこんな愚かなことを言っているのだろうか。

驚きと呆れから、思考が一時停止する。

だから間に合わなかった。

少女が男を殴りつけるのを、止められなかった。

男の悲鳴と倒れこむ音に我に返る。

「きつ、貴様ああ!!」

裏返った甲高い叫びが耳をつんざく。

それと同時にウォルトは地面を蹴った。肩をいかせて男を見下

ろしている少女を抱きかかえ、無理矢理地に伏せさせる。

少女が立っていた場所を、光線が通過した。光線が直撃した倉庫の外壁は熱した鉄を水の中に入れたときのような音をたて、焼け切れた。

「っ！」

腕の中で、組み伏せた少女が息を詰めるのが聞こえた。

ウォルトは少女から体を離すと、彼女を背後に庇うように起き上がり身構える。

目前に迫った炎に向かって手を突き出す。飛来する火の玉を掴むようにして伸ばされた手に、その魔力の塊は触れるか触れないかのうちにポシュウ……と気の抜けたような音をして掻き消えた。

続けざまに向かつてくる多様な魔法。それらは全て、ウォルトに触れる直前で無効化されてしまっていた。

「なんだ……」

「何故……？」

目に見えて男と、そして護衛たちがうろたえる。

魔法攻撃が止んだのを見て取って、ウォルトはホッと息をついた。真っ正直に自分と少女だけを狙ってくれてよかった、と。

顔を上げようとした時。

少女を組み伏せる動きと、魔法に伴って発生した風圧によってフードが脱げかけていることにウォルトは気がついた。

慌てて戻そうと手を伸ばすが、僅かな差で間に合わない。

茶色のローブの下から現れるのは、全てを跳ね返す白。

年齢に合わない真っ白な髪が、衆目に晒された。

「……ウォルト・ラヴェール？」

顔を真っ赤に腫らしている男が、確認するように呟いた。応える者はないが、その場にいる全員が同じ名を思い浮かべていただろう。

顔は見たことがなくとも、噂だけなら誰もが知っている。
魔法を掻き消す体質を持った、白髪の剣士の名を。

19話 殺人誹謗

男は少女に殴られた怒り、そして腫れた顔の痛みも忘れているようだった。

肉付きのいい胸を張って、腕を組む。

「ふん、国を追われたら次は反乱分子の味方か。身替りが早くて結構なことだな」

精一杯の侮蔑を込めた言葉を、男はウォルトに投げつけた。

しかしウォルトの表情は変わらない。

無感情に冷めた目で、男を見据える。

「俺はどちらの味方になったつもりもないよ」

低く、友好の意思の欠片も感じられない声だった。

立ち上がり、剣の柄に手をかけるが、未だ抜くつもりはない。

「俺はいつでも、俺の味方だから」

自身の信じる正義の為、そして自身の大切なものを傷つけない為、それは全て自分の為に行うことでしかない。

敬愛する師であるリオンから受け継いだ考えは、ウォルトの中でしっかりと根付いていた。

「では何故その娘を庇う？」

「目の前で無意味に人が死ぬのを見たくないから、かな」

本当なら、ウォルトは少女が男を殴る前に止めるべきだった。そうすれば周囲を危険に晒すこともなかった。

しかし、少女が先に手を出してくれてよかったとも思っている。

そうでなければ、ウォルトが男を殴っていた。

「魔術師だろうとそうでなかつた、命の価値は変わらない。簡単に殺そうとするな」

間引くという言葉も、殴られて相手を消そうとするのも、気に入らない。

ウォルトの声に怒りが滲む。

今すぐに剣を抜かないのが不思議に思えるほど、ウォルトのまとう空気が陰しくなっていた。

男は僅かに気圧されたように後退するが、すぐにくつと喉の奥で笑った。

「流石はウォルト卿」

「？」

「魔術師でないだけあって、下々の考えをよく理解している」

何だそんなことか、とウォルトは小さく息をついた。

軽く肩を竦めて見せたのを、男はどう受け取ったのか不敵な笑みを浮かべている。

だが、男が考えているほどは 否、全くと言っていいほどに、ウォルトはその皮肉に打撃を受けていなかった。

「魔術師であることが、そんなに偉いとは思わないけれど」

吐息と共に零した独り言は、紛れもない本心である。

だが、慢心している魔術師にはただの強がりになしか聞こえなかった。ますます上機嫌に笑みを深める。

「今日は引くことにしよう。これ以上余計なおしゃべりをしていたら、ウォルト卿に殺されてしまうからな」

撤退。

男は強気な発言をしているが、実際には逃げ帰るのだ。

ウォルトがこの場にいる以上、民衆を傷つけての税徴収は不可能である。

目的を達することができないということを、悟らせない為の虚勢。だが、当人ですらそれを虚勢とは気付いていないのだろう。

男の見下すような笑み、翻した身の軽さが自身の勝利を信じている証拠だった。

護衛の魔術師を引き連れて、男が立ち去る。

数日後にはまた来るのであるが、ひとまず今回は回避できた。こうして居場所が国の人間に知られた以上、今後追手が増えることが予想されるが、その心配は後回しでもいいだろう。今はそれよりも。

「ウォルト・ラヴェール……」

背後でざわめきが生じる。悪意のはっきりと感じられる声がいくつも聞こえる。

ウォルトはゆっくりと民衆を振り返った。

騒動の中心にいた少女と、それを取り巻く町人たちが話し合っている。その間も彼らの目はウォルトに注がれていた。

その目はどう解釈しても好意とはかけ離れていて、ウォルトは気まずさを禁じえない。

「長……あの男に、暫くここに滞在してもらってはいかがだろうか」

「そうすれば奴らもそうそう手出しはできないはず」

「だが奴は国の人間だ」

「ですが今は謀反人として追われる身ですぞ」

男たちが少女にウォルトに滞在を勧めるよう進言し、少女がそれを拒否している。何人かは少女と同意見らしく、何事か言い合っている。

どうやら少女はこの町の長のようだ。恐らくは町長が亡くなって娘である少女が継いだのであろうが、だからこそ先程の騒動では少女が先頭に立っていたのだろう。

ある程度予想はしていたものの、実際に少女が長と呼ばれているのを聞いてウォルトは納得した。

レンが、荷物を持って近付いてくる。話している声はレンには聞こえていなかったが、見るからに不穏な空気に耐え切れなくなったのだ。

「あんな人殺しなんか頼るもんか！」

レンの動きが止まった。衝撃に目を見開き、そして悲しげに表情が歪む。

ウォルトは諦めたように苦笑していた。

「人殺しって！」

キツと、レンが目元を険しくする。抗議をしようと開いた口を塞ぐように、軽くウォルトの手がかぶせられた。

「レン、いいから」

「でも、」

「事実じゃないか」

まだ不満そうな精霊に笑いかけ、ウォルトはレンの持ってきた荷物を肩に担ぎ上げた。

町人たちの口論は、徐々にウォルトを追い出す方に傾いている。

尤もウォルト自身、既に出て行く意思を固めているのだから、議論の方向は正解だといえる。

揉めている町人たちを尻目に、ウォルトはこの場を立ち去るべく歩き出した。

そのすぐ後をレンが小走りについて行く。

遠巻きに見ていた者たちが、彼らを呼び止めることはなかった。

日は既に辺りを赤く染めるほどに低くなっている。刻々と色を濃くしていく赤が紺に変わるまで、そう時間はかからないだろう。

今日も野宿から逃れることは出来なかった。

「あーあ。せつかく久々にベッドで寝られると思ったんだけどなあ」

普段となんら変わらない明るさでばやくウォルトに、返ってくる声はない。

レンは翼を消した状態でウォルトのすぐ後ろを歩いていたが、俯いて黙り込んでしまっている。

「どうしたの？」

振り向き腰を屈めてレンの顔を覗き込む。

拗ねて唇を尖らせた顔は、随分と子供じみている。

「……ウォルトは、あんな風に言われても平気なんだね」

「人殺しって？」

問い返すと、うん、と小さく肯定が返ってきた。

「だって、人殺しじゃないか。俺は」

ウォルトは、今まで国内外問わず多くの戦いに参加してきた。

他国との戦争、自国の内乱。それこそ手にかけてきた人数など数えてもいられないほどである。

「だからって、あんな謗りを受けていいなんてことにはならない」

「どんな理由だろうが、殺しは殺し。力を持たない民衆が、そういった行動を憎むのは正常な証だよ」

戦で敵を殺す。もしくは、人や町を襲う罪人を殺す。

これらは法で裁かれることはないが、一般民衆にとってはどちらも馴染みのないことだ。

更に、先程の町はウォルトが殺してきた反乱分子に関わりがあった人間がいても不思議ではない。

「したくなかったことでも、そうするしかなかったとしても、正当化しなきゃいけないんだよ。自分が屍の上に立っていることを忘れちゃいけないんだ」

本当は、レンとて民衆の言っていることは分かっている。

ただ、主人が傷付けられるのを黙っていられるわけではなかった。ウォルトは笑って受け止めているが、罪と悪意を突きつけられて

も全く気にならない訳ではないのだから。

「……ウォルトは、悲しくない？」

「俺の代わりに怒って悲しんでくれる精霊がいるからね」

いい子いい子と頭を撫でると、レンは首を振ってそれを払った。

ウォルトは払われて気を悪くするでもなくすぐに手を離す。

「茶化さないでよ」

「一応、本気なんだけどなあ」

「一応って」

その部分だけ強調して言ったことに疑問を感じレンが聞き返すと、ウォルトは声を上げて笑い誤魔化した。

笑い声をあげながら、ウォルトは踵を返し歩を進める。

その後を追うレンの表情は、先程とは比べ物にならないほどさっぱりとしたものだった。

主従が、自分たちを見つめる人物がいたことに気付くことはなかった。

19話 殺人誹謗（後書き）

章ごとにタイトルの文字数を決めるのに無理が生じているとは思いつつ…。

3章の前半部分がここで一区切りです。

20話 次代の王

「お待ちしておりました。次代の王」

暦の上では既に初冬、しかし厚い雲に覆われ通常よりも寒気の強い午後。

ウォルトとレンは突然かけられた言葉に目を瞬いた。

ここは西方最大の都市リディア。西地方全体を取りまとめる諸侯の居城がある街である。

声をかけてきたのは、小柄な老人だった。柔らかな笑みをたたえ、まっすぐ背すじを伸ばして立つ姿は上品そうな雰囲気漂わせている。

「宗教の勧誘なら他所でどうぞ」

素っ気無く返し、ウォルトは道の真ん中に立つ老人を避けて先へと進む。存外にあっさりと通ることができた。

ウォルトの背にくつつくようにして続くレンにも、何もせず道を開けた老人は、だがそのまま行かせてはくれなかった。

「貴方でなければならぬのです。ウォルト卿」

主従の足が止まる。

そして、止まってしまったことに後悔をした。これでは老人が呼んだ名前の当人であると認めてしまったようなものだ。

内心で舌打ちしながら振り返る、その表情は動揺を隠した無表情だった。

「ウォルト……というと？」

「貴方のことです。ウォルト・ラヴェール様」

「残念ながら人違いです。ウォルトというと例の謀反人でしょう？」
ウォルトはいつも通り深く被ったフードで目立つ白髪と顔の半分

を隠している。

レンも翼を消した人間の姿でウォルトのマントを羽織っている上、顔も隠している。

老人に自分たちの正体を特定できる要素がない以上、しらばっくれるのが上策と言えた。

「別に、捕えようなんてつもりはありませんから」

「だから、人違いだと言っているでしょう。そんな名前噂でしか聞いたこともないよ」

全く知らないというにはウォルトの名前は有名すぎた。

不自然でないように返すには噂で知っている程度で丁度いい。

「そう、噂ですか。それでは、その容姿について聞いたことは有りで？」

老人は引き下らない。

ウォルトはフードで隠された眉を微かに顰めた。

老人には既に確信があるのか。それとも、単にしつこいのか。

「さあ、どうだったかな。お前は覚えてる？」

相手は老人が一人、いざとなったら逃げるくらい簡単だろう。

それよりも一度止まってしまった以上、急に逃げる方が不自然だ。そう思って話を続ける。

レンもその意を汲んで、ウォルトに話を合わせた。

「どうか。聞いた気もするけど忘れたよ」

「ウォルト卿は白い短髪で高身長、連れている精霊は黒髪で細身の美人。噂ではそう聞いていますね」

「へえ、それはかなり目立つ組み合わせですね」

我ながら白々しい。吐きたくなる溜息を飲み込む。

当人であるのに知らないふりをしている為か、居心地が悪くて仕方なかった。

「そう、ですから……あなた方を特定するのは簡単なことですよ」
違うというのなら、その顔を隠しているものを取り払えと。老人は言外に滲ませている。

ウォルトは舌打ちをすると、踵を返して走り出す。
その際にレンの手を掴むのも当然忘れない。

急に引つ張られてレンの体が傾いたが、すぐに体勢を立て直してレンも走る。

軽く振り返って見ても老人が追いかけてくる様子はない。

しかし、視線を前に戻してウォルトは足を止めた。急停止についていけなかったレンがウォルトの背中にぶつかり、小さく悲鳴をあげる。

建物の影から出てきた人、人、人。

老若男女問わず現れた十人以上もの人が行く手を塞ぐ。
ウォルトたちはすっかり取り囲まれてしまっていた。

「……何のつもりですか？」

女子供や老人を殴り飛ばしてまで逃げることは憚られた。
人々の輪の中に入ってきた老人に問う。ゆっくりと歩み寄ってくる老人は、その剣呑な響きを帯びた声にも怯んだ様子はない。

「そう警戒なさないで下さい。危害を加えは致しません」

小さくウォルトは溜息をついた。

視界の半分近くを覆うフードを脱ぐ。既に正体を知られている以上、邪魔なだけのそれをいつまでも被っている必要はない。

レンが覗くように顔を見上げてくる。

「大丈夫だよ、レン。大人しく従おう」

微笑みかけると、レンは頭から被っているマントを肩にかけなおした。しかし未だに不安そうに周囲を取り囲む人々を、そして老人を見ている。

「本当に、信じていいの？」

張り上げた声は、主人と老人、双方への確認の為。

「大丈夫だよ」

「ご安心を」

頷く主人、微笑む老人。

レンがウォルトの言うことを信じないということはまずない。

だが、ウォルトに危害が加えられる可能性については、安心できないのが実情だった。

「我が主に会って頂きたいのです。全ての説明はそれから」

「……主？」

「西域の長、ノア・ブランカ様でございます」

怪訝そうに眉をしかめると、老人は主の名を明かした。

周囲を眺め、次いで納得したように頷く。

周囲を囲む人々は年齢も様々で共通点があるようには見えない。だが、諸侯の命令となれば、彼らを取りまとめるのも不可能ではないだろう。

しかし、それだけに不穏な予感を持たずにはいられない。謀反人として国に追われている人間に用事など、まともな内容であるはずがない。

「……何か、依頼でも？」

「そのようなものです。さあ、どうぞこちらへ」

老人が歩き出したので、ウォルトとレンも少し遅れてそれに続いた。

「お乗りください」

先に進んだ老人が指し示したのは、古い馬車だった。古いとは言え、元はかなりいいものなのだろう。造りはしっかりしているし、乗り込んでみれば中は広く椅子も座り心地がいい。

広い町だけに、現在地からリディア城まで徒歩なら一時間程かかる。迎えに来た者が馬車を勧めるのも当然と言えた。

「少し急ぎますのでね」

一言断りを入れると老人は御者台に腰を下ろし手綱を取った。

緩やかに、馬が足を運び始める。歩みは徐々に勢いを増し、速度を上げていった。

「うわあ……」

外を眺めるウォルトの耳に、レンのうんざりしたような声が届く。速くなるにつれ激しくなる揺れに辟易したようだ。

「ウォルト」

「ん、何？」

窓枠に頬杖をつき、外を眺めながら返事をする。その声が固いのは、舌を噛まないようにと気をつけてのことである。

「話ってなんだろうね」

「さあ」

響く車輪の音に掻き消されないようにと、自然と声は大きくなる。しかし声の大きさのわりに、ウォルトの返事は素っ気無かった。

「“次代の王”とか言ってたけど……」

「どう考えてもいい方向には予想できないな。ただ」

そこでようやく、ウォルトはレンの顔を見た。

「ノア・ブランカ氏自体は、噂を聞く限りでは信用できると思う。民衆からの人気も高いしね」

再び外へと視線を向ける。すっかり葉が落ちた街路樹の為に寂しく見える風景だが、町並みはよく整備され道行く人の表情も明るい。リディアのみならず、近隣の町もノアが諸侯に就任して以降は栄えていると聞く。

善政を敷いているのは間違いないとウォルトは判断していた。

「もっとも、会ってみなきゃ断言はできないけど」

どちらにせよ、このまま逃げ出したらリディアに滞在するのは難しくなる。話を聞くだけでも聞いた方が今後の行動を決めやすい。

そのような内容のことをレンに説明しているうちに、馬車は城門を通過した。

20話 次代の王（後書き）

3章後編、ようやく本筋に入ります。

21話 美城の主

馬車は、城の広い前庭でその動きを止めた。

御者の老人が戸を開くのを待って、ウォルトとレンは石畳の上に足を下ろした。

「あー気持ち悪かった」

小さくぼやきながら組んだ手を上に伸ばし、大きく息を吸い込む。耳聴く主人の呟きを聞きつけたレンは苦笑してウォルトの背をさすった。

馬車の中で揺れに不平を洩らしたのはレンであつたが、ウォルトも相当参っていたのだ。

未だに胃の中でわだかまる不快感を収めようと、冷たい空気を肺に取り込もうと深呼吸を繰り返す。

落ち着いてくると、ウォルトは前庭をぐるりと見回した。

「ふーん？」

思わずと言つたように感嘆の声が洩れる。

通路となる石畳の両脇には豊かな芝生が広がっていた。植え込みは丁寧に切り揃えられ、花壇には遅咲きのコスモスや水仙が彩りを添えている。

今は季節柄質素な様相を呈しているが、春にもなれば更に明るく息づくだろう。

そして更にウォルトの目を引いたのは、噴水の縁に腰掛けている民衆であつた。

幾人かで歓談している彼らは、身形から察するに城勤めの人間ではない。

「ノア様が、前庭だけでも憩いの場として使ってほしいと開放なさ

っているですよ」

ウォルトの視線を追って、老人が説明をする。

口元に指を掛け、ふむふむと何度も頷く。

「それじゃあ、治安はかなりいい方なんですネ」

「どちらかといえば良い、という程度でございましょうか。ここより先は当然警備を厳しくしておりますし」

老人の言う通り、城のエントランスにはしっかりと警備兵が張り付いているし、屋上では数人の兵士が見張りをしているのが見えた。それはそうだろう。ここまで民衆が入り込める以上、あまり無防備にしているのでは城主としてあまりに危機感に欠けており、愚かだ。

老人に促され、ウォルトたちは城内へと足を踏み入れた。

中から見ても、やはりその城は美しかった。

高い天井を彩るレリーフも石造りの床に敷かれた絨毯の意匠も繊細で、王城のそれに勝るとも劣らない。

だが決して贅沢に過ぎることなく、質素な風合いを残している。

中央のホールを通り抜け、階段を上りながら、レンは前を歩くウォルトの袖を軽く引き隣に並んだ。

「なんか、さつきから見かける人皆年齢層高くない？」

歩きながらウォルトの耳元に口を寄せ、小声で囁く。

城に入ってから、幾人かの使用人を見た。しかし、レンの言う通りその年齢層は随分と高く、一番若いと思われるメイドでも四十歳近くであるように思われた。

「ああ、それは多分、救済措置だからじゃないかな」

「救済措置？」

「未亡人とか失職した人とかに仕事をあげて養ってるんだと思うけど」

ウォルトも、使用人に中年から老人しかないということには気付いていた。

そして過去に学んだことを思い出したのだ。権力者が景気対策に、経済的弱者を重用するということを、本で読んだことがある。

ウォルトの声はレンに合わせてごく小さな音であったが、彼らを案内する老人には十分聞こえていたようだ。振り向いて、ウォルトの考えを肯定した。

「ノア様はいつでも、西地方の為を思っておりますから」

そのようなことを話しているうちに、ついに辿りついた。

城主の執務室。その扉の前で、三人は歩みを止めた。

「ノア様、ウォルト様と黒翼様をお連れしました」

老人が声をかけると、返事よりも先に扉が開かれた。

扉を開けたのは、身長こそレンと大差ないが筋肉質で体格のいい男である。右目を覆う黒い眼帯が印象的だった。

予想外のことに見開くウォルトを目に留めると、男はにこりと人好きのする笑みを浮かべた。

「ようこそ。私がリディア城主、ノア・ブランカでございます」

まさしく、その男こそが西方諸侯だった。

「諸侯様直々に出迎えてくださるとは、恐縮ですね」

城主自らが扉を開けて訪問者を招き入れるなど、考えもしていなかった。

驚きは皮肉となってウォルトの口からこぼれ出る。その声が溜息混じりになっていったとしても、仕方のないことだろう。

「驚かせてしまいましたかな。私がお呼びした以上、これくらいは当然とおったのですが」

ウォルトの態度に気を悪くした様子もなく、ノアはウォルトたちを室内に招き入れた。

勧められるままに長テーブルの一席に着くと、ノアは老人を退室させる。広い執務室にはウォルトとレン、そしてノアの3人だけに

なった。

向かいの席に座るノアとの距離は、テーブルに飛び乗れば手が届く程度。ウォルトは自身の腰にさしている剣に視線を落とす。

「よろしいんですか？」

「何がですか？」

「俺から剣を取り上げず、レンの力も封じずに、護衛も外して」

一足飛びで斬り伏せられる距離。精霊が魔法を使っても逃げられない場所。

ノアを殺そうと思えば、簡単に成し遂げられる状況だ。

「ウォルト卿は、私に手出しなど致しますまい」

「信用していただいているようでは何より」

呆れたようについた溜息が重く落ちる。

確かに、ウォルトはノアに対する害意など欠片も抱いてはいない。だが、先日訪れた町では人殺しと罵られ、貴族には「機嫌を損ねたら殺される」と謗られた。

それこそが世間一般のウォルトに対する認識なのだ。

だと言うのに、そのウォルトに対して無警戒であるのだから呆れるのも当然のことだった。

「こちらが貴方を信じなければ、話をまともに聞いてなどもらえまい」

にこやかではあるが、力強さを感じさせる声音である。意志の強さをそのまま表すかのように、ウォルトには聞こえた。

これでは周りの部下も心穏やかではいられないだろう。そう呆れはするものの、ウォルトはこの城主を嫌いになれそうになかった。却って好ましく思う程である。

「それで、そのお話とは何ですか？」

「そうですね。では、単刀直入に申しましょう」

椅子の上で身動きし、話を聞く体勢を整える。

碌な話ではないという予想に変わりはない。しかし、納得のいく

説明があればあるいは、という程度には思えるようになっていた。

だがそれでも、ノアの言葉はウォルトの思考を止めるのに十分な威力を持っていた。

「帝国の打倒、そして新しい国の設立をして頂きたい」

21話 美城の主（後書き）

あまり話が進みませんでした…。

22話 領主の想

予想はしていた。

次代の王、などという言葉を突きつけられれば、嫌でも考えることである。

「知つての通り、今この国は混乱の中にあります。虐げられる民、頻発する内乱、終わらない争い」

重々しく語るノアの声が、3人しかいない執務室に響く。ウォルトはそれを呆然と聞いていた。

「もはや、帝国を討ち滅ぼさねば、民の生きる道はない」

「……で、何故俺が？ 貴方がやればよろしいでしょう」

我に返ったウォルトはげんなりとした様子で問う。

わざわざ待ち伏せて、唐突に無茶苦茶な要求。不審に思うなという方が無理な話だ。

「貴方でなければならぬ」

「ですから、それは何故」

ノアは真剣な眼差しでウォルトを見つめている。冗談や悪戯の類でないことはその目を見れば理解できた。

しかし真剣であるだけタチが悪い。ウォルトは不信感も露に問いかけた。

「相手は大国。今のようには地域ごとにバラバラで抵抗しているだけでは、勝ち目など有り得ない」

「貴方がまとめれば、西方の各領地は従うでしょう。なんといつても諸侯様なんですから」

そう、それならば納得できる。己が王になる為に力を貸せと、そう言うのであれば理解できた。

ウォルトはいくら家柄が良くとも、いくら強かろうとも、ただの傭兵でしかないのだから。

間違ってもそんなことを依頼されるような人間ではない筈だ。

しかし、ノアの考えは違うらしい。

「確かに、私が呼びかければ領内の者たちは従ってはくれるでしょうな」

含みを持った物言いにウォルトは目を細めた。

「しかし、それだけではまともにはしない」

「俺が先頭に立つても、余計にまともなくなるだけだと思いますけど」

先程よりもウォルトの態度が硬化していくのが、話しているだけではつきりと伝わってくる。

ノアは暫し視線を落としたが、それでもウォルトに向ける眼差しは柔らかいままであった。

「ウォルト卿は、人をまとめるのに必要なのは何であるとお考えかな？」

ノアはテーブルの上で組んだ指を解き、顎鬚を撫でた。口調とその仕草で、場の空気がいくらか和らぐ。

ウォルトはノアの考えを探ろうとするように、じつと顔を覗きこんでいた。

「上に立つ者の人格、ではないですかね」

ゆっくりと瞬きをしながら、静かに答える。

着いて行きたいと思わせる魅力がリーダーにあるか否か。少なくともウォルトは、戦場にいる中でまとものある軍にはそれが備わっていると感じていた。

「成程。それもまた、一つの答えでしょう」

重々しくノアは頷いた。それは真摯な態度ではあったものの、教

師が生徒の話を聞いているときのような微笑まじさを感じているかのような響きを持っている。

ノアからしてみれば、ウォルトなどまだ経験の浅い若者なのだということだろう。

「おっと失礼、少々言い方が悪かったようすな。決して馬鹿にしているわけではないですよ」

そのことに気付いたようで、ノアは手を挙げて訂正した。

「貴方の言うことは正しい。ですが、地方という規模になるとそれだけでは足りない」

「普段から戦を生業にしている人間とは違う、というのは分かります」

「その通り。一般人を巻き込むとなると『必ず勝てるという保証』が必要なのです」

ノアの言っていることは理解できる。負け戦で士気が上がるはずもない。

そしてウォルトは傭兵としては負け知らず、味方につけておきたいというのも解る。

だが、それでも解せないことがある、とウォルトは重く溜息をついた。

「先程の言葉をもう一度言いましょうか。『貴方がやればよろしいでしょう』力を貸すだけならともかく、上に立つ意味が分からない」
先刻から、話が一向に進まない。

色々と理由をつけてはいるが、どれもウォルトを王にしようとする決定的な根拠にはなっていないのだ。

徐々に不信感が募ってくる。

そこで、ずっと静かに話の行方を覗っていたレンが口を開いた。

「ノアさんは、ウォルトに戦わせてどうしたいの？」

「どう、とは？」

「仮にウォルトが王になったとして、そのことによってノアさんに何か得はあるのかな」

それはウォルトもずっと気にかかっていたことだった。

ノアは現在西地方の諸侯。事実上、皇帝の次に高い地位に就いている。王にでもならない限り、今以上の地位は望めない。

レンの表情を覗くと、少々疲れたような表情をしていた。声からは感情が読めなかったが、話を理解するのに必死だったのだろう。ノアは、レンの問いかけに少々考え込むように顎に手をかけた。「敢えて言うのなら、仕えるべき相手が変わることが一番のメリットか。私はただ、確実にこの国を変えたい、それだけなのですかな」

「ノアさんでは、無理なの？」

「私の名の元に反乱を起こしたら、情報がすぐに国に伝わってしまうでしょうな。戦の準備が終わる前に潰されるのが目に見えている」
ようやく、ノアは自身が中心となって戦わない理由を明かした。成程、とウォルトはようやく合点がいった。

ノアの発言は一見すると、ウォルトを犠牲にして自身は無関係を装おうとしているかのようにも思える。

だがそれでは失敗を前提としているし、確実に成し遂げたいというノアの意思と矛盾する。

ウォルトの居場所は特定されていない。リディア城にいるという情報が流れても、ただの噂と片付けることができる。

ウォルトを匿うことが可能な限り、危険はあるものの反乱を潰される可能性は確実に低くなる。

ウォルトの疑念が薄くなったのを感じたのだろう。ノアはにこりと微笑んだ。

「納得していただけましたかな？」

「ええ、一先ずは。ただ、もう一つお聞きしたい」
「なんででしょう？」

「貴方に入れ知恵したのは誰ですか？」

ノアは驚いたように目を瞬き、次いで声を上げて笑い出した。

「これは驚いた。入れ知恵などと、人聞きの悪い」

くつくつと愉快そうに声を震わせる。

ウォルトは憮然として腕を組んだ。

「なら言い方を変えましょうか。貴方に、俺を推薦したのは誰ですか？」

「何故、そのようなことを？」

ウォルトの強い眼差しを受けても、ノアは笑顔を崩さない。ウォルトがそのような問いをしたことが、楽しくて仕方がないといった様子である。

「貴方が、俺でなければならぬという決定的な理由を話そうとしないからです」

ノアは有能な人材である。それはリディアの町、そして本人を見れば分かる。

その有能な人物が、納得の出来ない説明を延々と続けるだろうか。答えは否。

だとすれば、ウォルトを選んだのはノアではないということになる。勿論、ノアの構想にも当てはまるからこそ、その人選を受け入れたのであろうが。

「ふむ、ヨシユア殿の仰る通りだったか」

ノアは相も変わらず笑い声ではあったが、それに加えて感心したような響きが混じる。

ウォルトはノアの呟いた名を聞き、眉を吊り上げた。

「ヨシユア？」

「そう。我々は西の賢者とお呼びしているが」

ウォルトはレンに視線を向ける。レンも知らないようで、目が合うと首を横に振っていた。

「ヨシユア殿がね、言っておったのですよ。ヨシユア殿が私に伝えたことを隠して話せば、貴方なら私の影にいる存在に気が付く筈、と」

ウォルトの眉間のしわが深くなる。

どうやらウォルトは、そのヨシユアなる人物に試されていたようだ。

「賢者、ね……。それで、その賢者殿はどこに行けばお話できるんですか？」

恐らく、ウォルトがリディアに着いてから今まで全て、その賢者の構想通りに事が進んでいるのだろう。

それ自体はウォルト自身の失態だが、面白くないのは確かだった。「私の客人としてこの城に逗留いただいておりますよ。お呼びしますか？」

ノアの声と、扉の開く音が重なった。

「それには及びませんわ」

透き通る、色気すらも感じられる声が室内に響く。

扉の前に立っていたのは、全身に黒衣を纏った女であった。

怪訝な顔をするウォルトとレンの横で、ノアが女の名を呼んだ。

ヨシユア殿、と。

23話 西の賢者

「……女性、だったんですか」

衣装と同じく黒のヴェールで覆われている為、顔立ちは分からない。

だが、漆黒の衣装の上からでも分かる華奢で柔らかな曲線は紛れもなく女のものであった。

クスリと、女が笑ったのが空気の揺れから伝わる。

「私の名前から、男性だと思いつままれる方は沢山おりますわ」

ヨシユアは男性名。女の言う通り、ノアから名前を聞いた時点でウォルトもレンも西の賢者は男だと考えていたのだ。

ヨシユアは、3人の座るテーブルに歩み寄ると、顔を覆うヴェールを取り払った。

「お会いできて光栄です、ウォルト様」

服の裾を摘み、優雅に一礼する。

上げられた顔を見て、ウォルトは思わず息を呑んだ。

その容姿は、レンや他の精霊たちによって慣れているはずのウォルトですら目を瞠るほどに、美しかった。

透き通る白磁の肌の上を彩る紫水晶の瞳、桜色に色づく唇。腰の下まで届く長い髪は夜空を溶かし込んだかの如く、深い紺色。

微笑むと、やや垂れ気味の目つきと相まって儂げな風貌が際立つ。大きな瞳は幼さを残してはいるが、大人の女の持つ艶を兼ね備えていた。

思わず言葉を失ったウォルトだったが、我に返ると小さく咳払いを一つ。

「貴女が、西の賢者様？」

「こちらではそのように呼ばれていますわ。他には魔女とも聖女とも」

厳しい声で発せられたウォルトの問いに、おどけたような明るい返答が返される。

「そう、確か……セラフイム近郊では『夜色の魔女』と」

ふいに真剣になる言葉の響き。ウォルトは訝しげに眉を寄せる。

「夜色の……？」

小さく呟いたのは、レンであった。

夜色の魔女。それは王都で幾度も聞いた名前。最強の傭兵と呼ばれるウォルト以上に名の知れた存在である。

強大な魔力でもって、幾度も民衆を救ったとされている。

確かに、ヨシユアの髪や瞳の色は夜を溶かした色だけれど、しかし。

ウォルトが小さく笑い声を洩らした。

「確かに。貴女があ夜色の魔女なのだとしたら、賢者と呼ぶに相応しいですね」

「あら、信じていただけませんか？」

ウォルトの笑い声は、あまり好意的とは言えなかった。呆れを多分に含んだその声に、ヨシユアが問い返す。

「いいえ？　ただ、夜色の魔女だとすると、貴女は一体何歳なんだろうと思っただけです」

そう、夜色の魔女にしては、年齢が合わないのだ。レンはウォルトの言葉に頷く。

ウォルトが初めて夜色の魔女の名を聞いたのは、まだレンに出会う前。年齢が両手で数えきれる程の頃。

だとすれば、限界まで若く見積もってもリオンと同年代。三十路近くということになる。

だが、ヨシユアの姿はウォルトと同年代、もしくはそれ以下に見

えるのだ。

「女性の年を尋ねるのはマナー違反ですわ、ウォルト様」

しかしヨシユアは悪戯っぽく片目を閉じ、微笑む。おどけたはぐらかし方には脱力感しか覚ええない。

ウォルトは今日何度目になるか分からない、溜息をついた。

「俺は貴女が何者であろうと関係ないですけどね。本題に、入りますしょうか」

一息ついたことによりいくらか棘の抜けた瞳が、立ったままのヨシユアを見上げる。

「何故、俺を推薦したんですか？」

「先程、ノア様のご説明なさったのでは？ 確実に勝てる保証が」
「建前なら聞き飽きました。本当のことを聞かせてください」

ヨシユアの言葉を遮ると、彼女は驚いたように頬に手を当てた。
しかし、その様子は随分と芝居がかっている。

「確かに、嘘について味方に引き入れようなどとは、虫がよすぎましたわね」

ヨシユアは数歩、考え込むようにその場で歩いた。結局元いた場所まで足を止めると、ウォルトに向き直る。

「恐らく、真実を話しても信じられないと思いますけれど」
前置きするヨシユアの表情は、真剣だった。

「私が、天に定められたその時を、視たからですわ」

「ぼかん、とウォルトは呆氣にとられる。

「はあ？」

それだけ、聞き返すのがやっとだった。

あまりにも馬鹿馬鹿しくて、怒る気にもならない。

隣に座るレンを見るとこちらにも似たようなもので、きょとんとし

た間抜けな表情を晒していた。

2人のこの反応も、ヨシユアは予想していたのだろう。苦笑してはいるものの、気分を害した様子はない。

「信じられませんか？」

「信じるとか信じない以前の問題です」

ウォルトは頭を抱えたくなった。本日は困惑する話が多すぎる。

「人間に……いや、精霊にだって未来視ができる人がいるなんて聞いた事がない」

言うてから、ウォルトはあることに思い至る。真顔になり、口元に手を当てて考え込む。

「いや、そうか。成程……それで聖女、と」

納得したように呟く。

「どうやら信じていただけたようですね」

「……聞いたことはありますよ。貴女がそれであるという確証はありませんが」

しかし、言葉とは裏腹にウォルトの疑念は急速に薄くなっていた。全てを信じられるわけではないが、無茶苦茶な話という訳でもないそう思ったのだ。

「未来視とは言っても、私が視られるのは天数の尽きるその時だけ」

そのウォルトの変化を感じ取ってか、ヨシユアは満足気に笑みを浮かべ、話を続けた。

「天数？」

「あ、俺知ってる。天が定めた命の期限みたいな」

ウォルトの疑問に答えたのは、つい先程まで思考停止していた精霊だった。

その説明を聞いて、レンが知っていた理由についても納得する。空の一族は天上の神に近いとされるからだ。

レンの説明に、ヨシユアも頷く。

「天数は、全てのものに存在します。それは国でも例外ではありません」

「それで、貴女が視たこの国の終わりは俺によるものだったと？」
頭痛を堪えるように額に手を当てる。

「そう、ウォルト様の指揮によるものですわ。ただ……」
そこでヨシユアは言葉を区切ると、レンの顔を見た。

「その運命を作ったのは、黒翼なのです」

沈黙が降りる。

頭の中を今のヨシユアの言葉が巡っているが、それは暫し空回りを続けていた。

数秒の後、沈黙を破ったのはウォルトの笑い声だった。

「何を馬鹿なことを。何故、レンが戦の原因なんかに？」

笑ってはいるものの、瞳には先程までよりも剣呑な光が宿っている。

話題に上がった精霊は、困ったように主人を見つめた。

「象徴ですよ、ウォルト卿」

答えたのは、今までヨシユアの話をも黙って聞いていたノアである。
「先程お話しした、民衆をまとめる話の続きになりますかな。勝てる保証の象徴が、黒翼だからです」

「言っている意味が解りかねます」

ウォルトは机の上で拳を握り締める。それは明確な拒絶だった。
「ですがウォルト卿。貴方が突如として追われる身となったことと、これは無関係ではないのですよ」

あくまで穏やかに、諭すように。ノアの告げる言葉に、握り締めた拳がピクリと揺れた。

その様子を見て、ヨシユアが一歩進み出る。

「お話し致しますわ、ウォルト様。黒翼が戦で象徴足り得るその訳を」

そうして、ヨシユアは語り始めた。
遠い昔の、今は忘れられた伝説を。

24話 神代の証

それは太古の昔、天上の神と人間の間交流があつた頃のこと。天上の王と地上の王は、兄弟の契りを交わしていた。互いの世界のことを話し合い、宝を交換し合う。

そんな中、地上の王はあるものに目を留めた。天上の王が遣わす使者である。

透明感のある白い肌、それを彩る宝石のような瞳。整つた目鼻立ちは芸術品のようで、そして極めつけは背から生える、純白の翼。天上の王の使者は、誰も彼もが美しかったのである。

羨む気持ちは日に日に募り、王はついには国中から美女を集めるようになった。

しかし、どのような美しい者を手に入れても、天上の使者ほど彼の心を惹きつけることはなかつた。

満足できない王は、徐々に心を病んでいく。

見かねた天上の王は、ある時地上の王に告げた。

「お前に、私の配下の一人を譲つてやつてもいい」

当然、地上の王は狂喜した。その為ならば何でもすると、天上の王に願ひ出る。

「ならば国を良く統治せよ。お前がまさに地上の王と呼ぶに相応しい存在となつた時、その証として与えてやろう」

それからの地上の王は身を粉にして国の為に尽力した。

智者を集めて助言を受け、民が飢えぬように奔走し、争いを調停する。

罰するべきを罰し、称えるべき者を称える。

文字通り東奔西走し、国を統治した。

それからどれだけの期間が過ぎただろうか。

ついに王は地上の全てを平定し、天上の王から褒美が授けられた。

届けられたのは、彼が望んだ通りの美しい使者。

白磁の肌と澄んだ瞳、人形のように整った目鼻立ちに生命の輝き。ただ、一つだけ違ったのは。

背中から生える大きな翼は、闇よりも尚黒かったのである。

「それで、天上の王からの下賜品がレンだど？」

話を聞き終え、ウォルトはこめかみを押さえながら問う。

「黒翼と同種の存在、という意味ですわ」

軽やかであるはずの、ヨシユアの声音が重く響く。

「空の一族が、元は神の眷属であったというのは有名なお話。ウォルト様もご存知でしょう？」

「ええ、知ってますよ」

ヨシユアは伝説を語る中で、空の一族とは一度も言っていない。天上の王の使者、それが空の一族と分かなければ話が伝わらないのだ。

「黒翼は王の証。王が持つならば栄光の、それ以外の者が持ったならば滅びの象徴」

黒翼の精霊を手に入れたなら、王になる事が出来る、と説明を続

けるヨシユアの言葉を聞き、ウォルトは頭を抱えた。

「……俺が国を追われることになった理由でもある、と仰いましたよね」

「アルト・ハーデスがこの伝説を知り、危機感を抱いたからですわ」
確認すると、納得すると同時に怒りが膨らんできて、ウォルトは歯噛みする。

「そんなくだらないことで……」

「ええ、くだらないでしょう？」

吐き捨てた言葉に、即座に切り返される。思いもしなかった同意に、ウォルトは目を見開いた。

ウォルトと視線が合うと、ヨシユアは微笑んだ。

「それ自体は、ウォルト様が謀反を起こす理由になんてなりませんし、反乱軍が勝つ保証にもなりはしません。我々も、勿論アルト・ハーデスだって分かっておりますわ」
「なら、どうして」

「民衆とは伝説に弱いものなのですよ、ウォルト卿」
再び、ノアが口を挟んだ。

「『神に選ばれた次代の王に率いられている』と。そう民衆が思う事が大事なのです」

「そのことによる団結、士気の上昇。ハーデスの危惧した脅威はそこなのですわ」

ウォルトとレンが反対勢力に加わったところで、さしたる問題ではない。

いくらウォルトが強くとも、1人や2人で国は潰せないのだから。しかし、王となるべき人物が登場し、民衆を扇動するとしたらそう悠長なことは言っていられない。

だからこそ、ウォルトは危険人物とみなされ追われる身となったのだ。

これはヨシユアの考えであつたが、ハーデスの思惑もこれと同じ、もしくはとても近い者であつたに違いない。そう予想していた。

ウォルトは俯き、膝の上で拳を握つたり開いたりを繰り返す。

暫しそうして考え込んだ後、顔を上げた。

「そうですか、それなら仕方ないですね」

その返事に、レンが驚いたようにウォルトの顔をまじまじと見つめる。しかし、そのウォルトの表情は。

「なんて言うと思いますか？」

穏やかな双眸を釣り上げ、ヨシユアとノアを睨んでいた。

「納得なんて出来ないし、諦めるつもりもありません」

唐突に、ふ、とウォルトの表情が柔らくなる。

「そんな伝説に頼らなければ、人を味方に付けることもできない。

そんな訳じゃあないでしょう」

ノアの話を開始してからずっと眉間にしわを寄せてばかりであつたが、それはウォルトの望むところではなかった。

未だに多少の冷たさが瞳に残つてはいるものの、普段の気の抜けた表情が取り繕われている。

それはどんな厳しい表情よりも明確に、依頼の拒否を表していた。その変化を見て、今度はヨシユアが眉間にしわを寄せることになる。

しかし彼女のそれはほんの一瞬で、次の瞬間には冷たい無表情を浮かべていた。

「今まで傭兵として各地で戦つてこられたというのに、今更何を躊躇われます」

完全に取り繕いきる前の隙を狙つた言葉に、ウォルトは笑顔を作り損ねた。微かに眉がひそめられる。

「戦でしか必要とされぬ身を嘆きましたか」

ヨシユアが言い放った瞬間、ウォルトは勢いよく立ち上がった。椅子が跳ね、ガタンと大きな音を立てる。

机に両手をつき、目を閉じる。重い溜息が、ゆつくりとこぼれた。「レン、もう行こう。これ以上話を聞いても時間の無駄だ」

激情を抑え、静かにレンを促す。扉に向かい歩き出すウォルトを、ノアもヨシユアも止めようとはしない。

「ああそうそう、ご存知でしょうか？」

思い出したようにヨシユアがウォルトの背に声をかける。

「アナト帝国の剣士隊長……リオン、と言いましたか。彼女が、ハーデスとの決闘に敗れ、亡くなったそうですよ」

勢いよくウォルトはヨシユアを振り返る。口元だけ笑みを作っているヨシユアと目が合った。

「ウォルト!」「ウォルト卿!」

レンとノアがほぼ同時に叫ぶ。

ウォルトが、ヨシユアの胸倉を掴みあげたからだ。

しかし、身長差の為に釣り上げられるようになっていくヨシユアは平然とウォルトを見上げていた。

「何をそのようにお怒りになります? 私はただ、事実をお教えしただけだというのに」

「……何故、わざわざこのタイミングで教えた?」

呻くように吐き出された声は低く、そして微かに震えていた。

「先生が死んだと聞かせれば、俺があなたの方の手を取るとでも?」

ヨシユアの胸倉を掴んだまま、ウォルトは顔を伏せている。その為に表情は外からつかない知ることは出来ない。

だが、震える声と手は雄弁に激情を物語っていた。

「……嘘、だろう？」

呟くような声は、祈りにも似ている。どうか、嘘だと言って欲しいと訴える。

既に胸倉を掴み上げる力は弱まり、ただヨシユアの服を握り締めるだけとなっていた。

「残念ながら、本当のことです」

無慈悲な宣告はノアの口から発せられた。

「ウォルト卿は人目を避けて旅してたからご存知ないでしょうが、あちらこちらで噂になっておりますよ」

まことに残念なことだ、とノアが言い切らない内に、ウォルトは部屋を飛び出していった。

慌てたようにレンもその後を追いかける。

「ウォルト！」

泣き出しそうな声で主人の背に向かって叫ぶが、それも届くことはない。

城の外では、大粒の雨が降り始めていた。

25話 決意の雨

城の前庭でウォルトは足を止めた。

冷たい雨に打たれながら、呆然と立ち尽くす。

「ウォルト！」

すぐにレンが追いついてきた。走るのに慣れていない精霊は、既に息を切らしている。

「ああ、ごめん、置いてきちゃって……」

振り返るウォルトの顔は濡れていたが、それが雨によるものか、また別のものであるのかレンには判別できなかった。

レンは暫し視線を彷徨わせ、そして俯く。

今にも泣き出しそうに瞳を揺らしているものの、まだ聞かせられた事が信じられずにいた。

リオンが死ぬ筈がないと、信じたかった。

お互いに無言で、ただ立ち尽くしていた。動揺が大きすぎて、何を言えばいいのか考えることすらできない。

やがて、ウォルトが口を開く。

「レン、馬車に乗ってる途中で宿屋が見えただろう」

唐突な台詞に、レンが目を見開いた。

言われた内容を幾度か反芻し、ようやく頷く。

「先に行って部屋取つといてくれないかな」

居た堪れなくなって、レンはウォルトから視線をそらした。ウォルトの表情を見ていられなかったのだ。

「俺もすぐ行くから」

「……分かった」

ウォルトは微笑していた。

雨に濡れて張り付いた前髪の下から覗く瞳は柔らかく細められ、

常と変わらない穏やかな表情をしていたのだ。

だというのに声は弱弱しく吐息に紛れ、かすれている。

「無理しなきゃいいのに」

雨音に掻き消されてしまうほど小さな声で呟くと、レンは歩き出した。ウォルトに言われた宿に向かう為だ。

確かに、今は互いに一人になった方がいいと感じていた。

「ウォルト」

「うん？」

ふと足を止め、ウォルトを振り返る。

「契約のことだけは、覚えておいて」

契約とは、精霊と魔術師による主従の誓いである。魔力を外に出すことの出来ない主人であるから、正規のものと同じというわけにはいかなかったが。

「大丈夫。誰かにあげたり捨てたりなんてしないよ」

「……そういう意味じゃなかったんだけどな」

困ったようにレンは眉を寄せたが、そのまま早足で歩いていく。雨に紛れ、精霊の姿が見えなくなるとウォルトは俯き溜息をついた。

「分かってるよ、それくらい……」

ウォルトがレンに与えたのは、魔力ではなく居場所。要求したのは忠誠ではなく共に在ること。

互いが強く望んでいたことに、深い意味はなかった。

だが、レンはあらゆる意味でウォルトと共に在り続ける。ウォルトがどのような道を選ぼうとも、違えることはない。

「そのことに甘えてばかりもいられないだろ」

せめて、与えることの出来る居場所をより良いものに。

ウォルトは空を見上げた。冬の雨が容赦なく顔に降り注ぐ。

「先生……」

自身が最も信頼と親愛を捧げる相手を思い描く。

最後に顔を合わせたのは2ヶ月前。前を見据え立ち続ける凜とした強さは10年以上前から変わらず、そして最期の時まで変わらなかったのだろう。

ウォルトは町で出回っている噂など知らない。

ヨシユアとノアが言っていることが事実だという確証もない。

リオンの死を聞かされた瞬間こそ衝撃に目の前が赤く染まる錯覚を受けたが、時間を置くにつれ現実味が希薄になっていく。

しかし同時に、奇妙に納得している自身がいることにもウォルトは気付いていた。

『私が死んだ後には何かが残る』

最後にリオンに会った日、彼女はそう言っていた。無意味なものなどないと。

リオンが己の死を予見していたとは思えないが、何か思うところがあったのかもしれない。兵士である以上、いつ死んでもおかしくはない身なのだから。

そこまで考えて、ウォルトは思考に引っかかりを感じた。

「……『ハーデスとの決闘に敗れて』？」

そう、兵士ならいつ戦場で命を落としてもおかしくはない。だが、何故味方であるはずの皇帝側近が出てくるのか。

ウォルトは急激にめまいを覚えた。その場にしゃがみ込み、口元を押さえる。

「俺の、せい……」

リオンが死んだ時期は正確には分からない。だが西方にまで噂が伝わってきているということは、少なくとも1週間やそのことではないだろう。

剣士隊の面子にウォルトを襲撃させたハーデスのことだ。失敗したとなれば、次に剣士隊長でありウォルトの師であるリオンを使うことは容易に考えられる。

その先にどういったやり取りがあったかは分からない。考えても想像の域を出ようがない。

いつの間にかウォルトは地面に座り込んでいた。舗装された地面に溜まった水がズボンに染み込んでくる。その氷のような冷たさに、我に返った。

「まずい、先生に蹴り飛ばされる」

自責の念に駆られ、身動きの取れない己を叱咤する。

ウォルトのせいだとしたら、どうだというのだ。防ぐ為にウォルト自身に出来ることなどなかったではないか。

リオンのことだ。「何をうじうじ考え込んでいるんだ、女々しい奴だな」くらいのことは言ってくるに違いない。

想像して、ウォルトは思わず苦笑した。

自然にこぼれた笑みが、じつとりと重く湿っていた気分を晴らす。覆われていた視界がすっきりと開けるのをウォルトは感じていた。

雨の中晒されて、思考も冷えてきたようだ。

悲しむ時間は必要だが、後悔に囚われているべき時ではない。

「さて、これからどうするか……」

リオンの死がウォルトにとって無意味ではなかったこと。それを証明するために第一にできることは、今後の行動を考慮する為の材料にすることだった。

今残されている道は、3つ。

帝都に戻るかこのまま逃げ続けるか、それともノアの要請を受けるかだ。

リオンがいなくなったことで、帝都に対する執着は半分以下になつてゐる。戻るとしたら、それはリオンの敵討ちをするか父に別れを告げるかだろう。

断ち切りやすくなつた執着を捨てて考える事が出来るだけでも、ウォルトにとっては前進であつた。

そして次に考えるべきことは、常に共にある精霊のこと。どの道を選んでも、レンは共に来てくれる。

だからこそ、レンにとって最善を選ばなければ彼の主人たる資格はないと、ウォルトは思つていた。

選ぶことの出来る道など最初から決まっていたのだ。

澄んだ晴天の瞳に、決意の色が宿る。

ノアとヨシユアは、先程と同じ執務室の窓から下方を眺めていた。暗い空の下、白い頭髮が際立つて見える。

「それにしても、よくウォルト卿が本日訪れると分かりましたな」

ノアは城の前庭に見える人影から、隣に立つ美女へと向き直つた。彼女も嫣然とした笑みをノアに向ける。

「簡単なことですね。西地域に入つた頃から見張らせておりましたの」

「ああ、配下を貸して欲しいというのはそういうことでしたか」

1ヶ月ほど前、ノアは請われて部下を数人ヨシユアに預けた。その人員は暫く姿を見ていなかったが、昨日全員が無事に帰還している。

「ウォルト卿が西に逃げる、そしてこのリディアを訪れるというのは簡単に予想できます」

ヨシユアはノアに背を向けて歩き出した。

「そして、それが最短距離からではないことも」

テーブルの上に腰掛け、ノアと視線を合わせる。

「最も人目につかず西地方に入るとしたら、北方の町を通らざるを得ない。ですから、何箇所か可能性のある街に人員を置かせていただきます」

ヨシユアによる種明かしを聞き、ノアは感心したように溜息をついた。

言葉として聞いてしまえばどうということもない。しかし、ノアに同じ事が出来るかといえば、無理だと断言できた。

まずウォルトがどこから訪れるのか絞り込むこと自体が難しいのだ。

ノアが再び外を見やると、既に白髪の青年の姿は見当たらない。

執務室の扉が開かれ、二人は視線を向けた。

全身ずぶ濡れのウォルトが入り口に立っている。衣服から滴り落ちる水分が絨毯をしつとりと濡らしていた。

「ようこそ、ウォルト様」

ヨシユアの声は笑みを含んでいた。こうなることなど分かっていたと言わんばかりの余裕を滲ませている。

「……勘違いしないでください。王になることを引き受けたわけじゃない」

静かに、どこか無感情に告げるウォルトの言葉を聞き、ヨシユアは首を傾げた。

「俺は傭兵です。力を貸せと、そう仰るのですしたら雇われましょう」これはウォルトに残された道の中で、可能な限りの抵抗であった。ヨシユアが描いたシナリオを破る、唯一つの矜持。

呆氣にとられるヨシユアを尻目に、ノアはくつくつと喉を震わせる。

「成程、まあ今はそれで良しとしましょう」

一先ずはウォルトを味方に引き入れた方がいいと判断したのだから。ノアはウォルトに手を差し出した。

「では改めて、力を貸していただけませんか。報酬は、貴方と黒翼の衣食住の保証、そして帝国からの保護、残りは出来高払いでいかがですか」

「十分です」

差し出された手を取り。契約の握手が固く交わされる。

「成立ですな」

アナト帝国暦480年12月。

西方の地リディアにて、反乱の種が芽を出した。

25話 決意の雨（後書き）

ここで、3章終了です。

黒翼もこれで半分が終了いたしました。ここまで読んでくださりありがとうございます。

ご意見等ありましたら是非よろしくお願いします。

また、現在人気投票を行っています。ページ下部にリンクを貼っておりますので、回答いただけると嬉しいです。

アンケートページはパソコンからしか見られませんので、携帯から投票してやろうという方は、メッセージなどからお気に入りのキャラクター名を教えてください。

人気投票一位と二位のキャラクターにしましては、小話などを今後用意する予定です。

宣伝ばかりとなりましたが、今後とも黒翼をよろしく願っています。

閑話 始まりの裏側

黒い鳥にとって、世界はとても眩しくて、そして遠いものであった。

木の枝に、鳥が座っている。

その姿は人と同じであり、しかし決して人ではない証に背中からは黒い大きな翼が生えていた。

鳥が宙に浮いた足でリズムを取っているとやがて、重厚な鐘の音が聞こえてくる。

この音が鳴ると、数え切れない量の少年少女がこの場所を通ることを鳥は知っていた。

鳥の眼が期待に色づく。

徐々に近付きつつある話し声、幾重にも混ざり合い内容を聞き取ることのできないそれを待つ。

子供特有のよく通る声、明るく活力に満ちた声。

鳥の座る木の前を、子供たちが通過した。

2、3人程度の子供が、何組も間をあげながら、時には連なって通り過ぎて行く。

楽しそうに笑い合う彼らを、鳥は羨ましく眺めていた。

あの輪の中に混ざりたい。共に笑い合いたい。

己の存在に気付いてほしくて、その場で羽ばたいてみせるが、その音すら子供たちには伝わらない。ただ、風もないのに木の葉がそよいだけである。

葉が擦れ合う音に気がついて何人かの子供が鳥の方を見上げたが、皆すぐに興味が失せたように去っていく。

誰かが己の方を見るたびに鳥は期待に満ちた表情で手を振った。
結局いつも答えてくれる者はいないのだけれど。

落胆して肩を落とす鳥の眼に、1人の少年が映った。

雪のように白く輝く髪を持った少年だ。彼はその空色の瞳を真っ直ぐに鳥に向けている。

時間としてはほんの3秒程度。しかしちょっと視線を投じてみた
とっただけにしては長い時間、鳥と少年は見詰め合っていた。

もしかして、と期待が高まる。鼓動が早くなり、急激に喉が乾く。
乾燥してひつつく喉からなんとか声を絞り出そうとする。

「おい、何してるんだ。早くしないと日が暮れる」

しかし、鳥が言葉を発するよりも早く、少年に声をかける者があ
った。

「ああ、ごめん。今行くよ」

白髪の少年よりも、大分背の低い少年が手をふっている。

「どうかしたのか？」

「んー、別に」

気のない返事をする少年。どうやら勘違いだったようだ、と鳥は
溜息をついた。

「今日こそ貴様と決着つけてやるからな！」

「またその話かー。いいよもう、ナリアスの勝ちで」

「この俺に不戦勝に甘んじると？」

遠ざかっていく会話。他の子供たちと比べて随分と物騒な話をし
ているものだと思っただ。

その後も何人かの子供たちが通ったが、鳥の期待に応えるものは

なかった。

静かになった通りで、鳥は泣いていた。
大きな黒い瞳からこぼれる雫が睫毛を濡らす。

お前に主人など見つかるものか

まだ鳥がこの世に生を受けて間もない頃、同胞に言われた言葉を
思い出す。

黒い翼なんて……汚らしい

お前などを従えようなどという魔術師などおるまいよ

異端なら異端らしく、さっさと諦めればいいものを

同胞たちの言葉は、鳥にとっては大きく、重く心を切り刻む。
鳥は主人を渴望していた。

同胞たちのある者は力の強い魔術師に見初められて去っていき、
またある者は主人を見つけることなく魂の寿命を尽きさせた。
始めの内は己も、同胞と同じように消えて行くのだらうと鳥は思
っていた。

しかし、いつまで待ってもその時は来ない。
自身よりも後に生まれた仲間が消えても、鳥は存在し続けた。
鳥は怖くなってきた。

明日には消えているかもしれない。明後日には消えているかもし
れない。

その時がいつ訪れるのか分からない。不安に思いながら日々を過

「ごす事が辛かった。」

そしてそれ以上に怖かったのは。

このままずっと、孤独のまま生き続けなくてはならないのかという考えがよぎったことだった。

人間も精霊も沢山いる中、どちらの輪の中にも入って行く事が出来ずにいる。そのことが寂しくてたまらなくなった。

そして、鳥はこの場所に来た。

毎日ここを通る少年少女は、魔術師の卵なのだ。異端である己すらも御すことのできる魔術師がいるかもしれない。

僅かな希望を持って、学校から帰宅する子供たちを待っていた。しかしそれは、余計に鳥自身を傷つけることにもなった。

これだけ沢山の魔術師が行き交うというのに誰も鳥には気付かないのだ。

時には鳥の同胞を連れている子供すらいた。

彼らの生気に満ちた顔はとても眩しくて、鳥は憧れと嫉妬を抱き続ける。

すぐ側にいるのに、彼らはあまりにも遠い。

手を伸ばせば届く位置なのに、その手を取る者は誰もいない。

鳥は日々、希望と絶望を繰り返し、泣き暮らしていた。

そしてその時はやってきた。

「誰か、待ってるの？」

始め、その言葉が己に向けられているものだ、鳥は気付く事が出来なかった。

少年は確かに鳥を見上げているというのに、期待を裏切られ続けた鳥はすっかり疑心暗鬼に陥っていたのだ。

ついに幻聴まで聞くようになっただろうか、とまで思いながら、
恐る恐る問いかける。

『……俺が、見えてる？』

訊ねると白髪の少年は驚いたように目を見開き、そして嬉しそう
に笑った。

「うん、見えてるよ。黒くて……綺麗な羽が。声も聞こえてる」

鳥は耳を疑った。

綺麗？ この羽根が？

今まで穢れているとしか言われなかった、黒い翼が？

気付けば鳥は涙を流していた。

いつもの絶望の涙とは違う。

胸にこみ上げるのは、切なさや幸せ。胸いっぱい満ちる感情を
抑えることができず、水滴となつてとめどなく溢れてくる。

涙がかすむ視界の中で、少年が手を伸ばすのが見える。

差し出されたその手を、取らない理屈はなかった。

それは、鳥が切望し続けた、明るい世界への切符なのだから。

閑話 始まりの裏側（後書き）

序章までのレンの話でした。

2月26日追記

【人気投票結果発表とおしらせ】

先日行いました、人気投票の結果を発表させていただきます。
投票数5票！

投票してくださった方、本当にありがとうございます。

さて、それでは結果を発表したいと思います。

1位 投票数5！！

なんということでしょう。全ての票がこの一人に集まってしまいました。

さあ、栄光の1位に輝いたのは……。

レン（黒翼）でした！ 流石タイトルになってるだけのことはある！

そして、お知らせです。

大変申し訳ないのですが、しばらくの間黒翼の連載を休止致します。
理由は、現在他の小説（短編）を書いているということ、そして3月から多忙になるということです。

続きを楽しみにしてくださっている方には、本当に身勝手な理由で
申し訳なく思います。

今書いている小説が仕上がり次第、黒翼の更新を再開させていただきます。
きます。

遅くとも4月になる前には戻ってくる予定です。

それでは、更新を再開した暁にはまたよろしく願います。

26話 一通の手紙

新しい年が明けてから2ヶ月。陽光は春めいてきたものの、アナト帝国のこの時期はまだまだ冬と呼んで差し支えない程度には冷え込んでいる。

ウォルトはリディア城に宛がわれた自身の部屋から窓の外を見下ろしていた。

奥まった場所に用意された部屋からは、丁度兵士たちの訓練場が見える。

リディアの職業兵士だけでなく民衆も混ざったそこは、存外に活気に満ちている。

戦とは民衆の平穏を崩す物。その割りに不平不満が目立たないのは、ひとえにノアの人気ゆえであろう。

そしてその中心にいる者を見てウォルトは満足気に微笑んだ。レンが兵士に混じって剣を振っているからである。常は下ろしている黒髪を高い位置で括り、装束の裾も動きやすいようにと上げている。

「大したものですな、黒翼は」

扉の開く音とノアの声を聞いてウォルトは振り返る。

「剣士隊の訓練を黒翼に担当させると聞いたときにはまさかと思いました」

「レンはいつも俺の訓練に付き合っていましたからね。技術だけならそこの兵士よりありますよ」

腕力と体力がないのが困りものですが、と付け加えてウォルトは肩を竦めた。

「しかし、兵士たちと打ち合っても遜色はなさそうですね？」

「剣の当たる瞬間だけ魔力で剣を支えてるんです」

現在のレンは、あくまで剣を支えることだけに魔法を使用しているが、魔法剣士などはそれ以上の力を付与することもある。

「いずれは魔法攻撃も織り交ぜながらの訓練もした方がいいですし、言いながら再び外を見やると、丁度この時間の訓練も終わったよ。うだ。」

「ところで、各領主からの返事の方はいかがですか」

机の上を見ると、封筒と便箋が散らばっている。それを見てのノアの問いであった。

「了承3、拒否11、未回答17というところです」

「ふむ……なかなか厳しい状況ですね」

「だから言っただけでしょう。俺じゃあまとまるものもまとまらない、と」

ここ2ヶ月というものの、ウォルトは西地方の領主たちに檄文を送り続けていた。

勿論過去に帝国に対し反対運動、もしくは内乱を起こした地域に限り、ではあるが。

「『領民を散々殺しておいて何を今更手を組もう、だ。ふざけるな』ということらしいですよ。要約すると」

言いながらも、ウォルトの口調は軽い。これくらいは予想の範疇だと言わんばかりに。

「ならば、私の名前で今一度呼びかけてみますか」

「それじゃあ意味がありませんよ。それに、貴方の名前を出すにはまだ時期が早すぎる」

手紙がリディア城に届いているのだから、受け取った側も背後にノアの実在を感じ取ってはいることだろう。

それでも、ノア自身から送られたわけでないということが、暫くは重要になってくる。

少なくとも、正式に戦を表明するまでの間は。

ウォルトが提案をやりわりとした口調で却下すると、ノアは机に寄りかかり眉間を押さえた。

しかし、そのノアの苦悩とは裏腹にウォルトの笑みには余裕が覗える。

「そんなに悲観したものでもないですよ、今の状況を思えば」

机の上から、一通の手紙を拾い上げる。ウォルトはそれを、ノアに手渡した。

それは拒否を表明する手紙の一つ。

「手を取れない一番の理由は、俺のことが信用できないから」

ノアが一通り目を通すのを待ち、ウォルトは口を開いた。

「未回答も含め、この答えが全てを表していると思います」

「と、言いますと？」

「要は信用さえせりやいいってことですよ」

ノアは片手で手紙を元の通り畳みながら、ウォルトと視線を合わせた。

悪戯っぽく細められた目は、若者らしい明るさを宿している。ただし、それはすぐに剣呑な光へと色を変える。

「まずは一戦。初戦で勝利すれば、こちらの人員も大幅に増えますよ」

笑いながらも真剣さを滲ませた声で話していたウォルトが視線を扉へと投じた。

壁に隔てられた廊下から、話し声が聞こえてくる。

この城では数少ない、軽やかな声音が2つ。

ウォルトの表情が、急に気の抜けたようなものになる。

「とは言え、今のままではその初戦も危ういですが……」

壁から背を浮かせ、ウォルトは出入り口へと近付いた。流れるような動作で扉を押し開ける。

「ぶ」

戸を開けたウォルトの手に伝わったのは、柔らかい壁に押し返されるような感触。

しかしそれよりも、聞こえた声の方にウォルトは眉をひそめた。

「……レン？」

開いた扉の間から覗きこむと、そこには確かに先ほど外で訓練をしていたままの精霊の姿がある。

「痛い……」

些か赤くなった鼻をさすって、レンは控えめに抗議の言葉を口にする。

ウォルトは慌てて扉を開け放つと、腰を屈めてレンと視線を合わせた。

「ごめん、まさかレンにぶつかるとは思わなかった」

「つまり黒翼以外の人にぶつかるとは思っていたわけですね？」

冷やかな声が、即座に横から突き出される。

レンの隣に、ヨシユアが満面の笑顔で立っていた。

その姿を見て、ウォルトは目をそらすと舌打ちを一つ。

「そう何度も同じ手に引つかかるわけないでしょう？」

「何のこと言ってるのかな」

「あら、お分かりになりませんか？」

にこやかにヨシユアに向き直るウォルトに、同じように笑顔で問い返すヨシユア。

お互いに爽やかな笑顔を向けているが、周囲に漂う緊張感は明らかにこの二人から発せられていた。

レンは鼻を押さえながら、小さく溜息をつく。

「とりあえず、俺はとばっちりを受けたただけなんだってことはよく分かったんだけど」

レンが恨めしげにウォルトとヨシユアを交互に睨んだことにより、毒々しい空気は一瞬にして霧散した。

「……ごめんなさい」

涙目で睨まれては、二人とも弱い。素直に謝る声が重なった。

気まずさを追い払う為に、ヨシユアは咳払いを一つ。

次いで、黒装束の大きく広がった袖から白い手が伸びる。

「それはともかく、ウォルト様。お手紙ですわ」

ヨシユアが指で挟むように持っているのは白い封筒。

何の変哲もない封筒だというのに、それを持っているヨシユアの表情は些か困惑が入り混じっている。

ウォルトはその手紙を受け取ると、すぐに差出人を確認した。

書かれていたのは唯一つ。

アイゼリア領主。

「アイゼリアってあのアイゼリア？」

「他にどのアイゼリアがあるのかは存じませんが、間違いなく北の要塞かと」

ヨシユアの困惑する理由は、さして意外なものでもない。

単に、ウォルトがアイゼリアに手紙を出していないというだけだ。

北の要塞。その名の通り、北域に存在する都市である。

ウォルトは封を切ると早速文面に目を通した。

「アイゼリアといえば、確か先年前領主が亡くなって、まだ若いご子息が跡を継いだとか」

「へー……」

気のない返事をしながら、ウォルトの視線は紙面を滑る。

文面に沿って走る視線が正面へと戻った。

レンもヨシユアも、そしてノアまでもが興味深げにウォルトの様子を窺っていた。

「アイゼリアが、リディア側についてくれるそうだよ」

ウォルトの説明は至って簡潔。

簡潔すぎて、却って疑問が湧いてくる。

説明を聞いた三者の顔には一様に戸惑いが浮かんでいる。

「それが確かなら、大変心強いことですが……」

躊躇いがちにノアが口を開いた。

戦力が足りないと話していたところに訪れた吉報。要塞とあだ名される都市だけに、アイゼリアの兵力は強大である。

「何故アイゼリアがわざわざ？」

決して冷遇されている都市ではないはずだ。

わざわざ帝国から勝算のない謀反人に寝返る理由がない。

更に言えば、本来ならリディアが反乱を企てていることなど知るはずもないのに。

「さあ、何を考えているのかは分からないけれど」

適当に応えるウォルトはそれでもやけに上機嫌である。

はて、とレンは首を傾げた。何か気になることがあるのか、しきりに首を捻っている。

「そろそろ時期的にも丁度いいかな」

ウォルトは顎に手を当て、思案するように視線を落とした。

だが、その呟きに3人が問いを発するよりも早く、顔を上げる。

「せっかくだし、アイゼリアまで挨拶に行ってくるよ」

近所を買う物に行ってくる、それくらいの気安さで発せられた言葉に、誰も咄嗟に反応することができなかった。

「駄目です」

一拍の間があつたものの、ヨシユアが即座に反対する。

「アイゼリアが何を思ってこんな手紙をよこしたかも分からないのに、危険すぎますわ」

早口にウォルトに食って掛かる。

「意図が分からないからこそ、挨拶がてら訊きに行くんじゃないか」
眦を釣り上げて迫るヨシユアに対して、ウォルトはのんびりと笑っている。

その様子を見て、ヨシユアは不機嫌そうに、しかしいくらか落着きを取り戻した。

「アイゼリアならば私が挨拶に行つてきますわ。ですからウォルト様はその他の領主のところへどうぞ」

「俺宛に手紙が来ているのに他の誰かを行かせるわけにはいかないよ」

忠言に全く聞く耳を持つ様子がないウォルトに、ヨシユアは深い溜息をついた。

「……分かりました。ならば兵の手配を」

「協力してもらうのに兵をそろそろ引き連れていったら失礼だろ」
「畏だつたらどうするのです！」

あまりにも意見を取り入れないウォルトに対し、ついにヨシユアが怒鳴った。隣に立っていたレンが大声に身を竦める。

ウォルトの言っていることはいちいちもつともで、反対する為の反対でないことは分かっている。

だが、怒鳴らずに入られなかった。

今ウォルトにいなくなれば、ようやく芽を出した計画が頓挫してしまうのだから。

「大丈夫だよシユア、俺がしっかりウォルトのこと守るから」

ヨシユアの怒りに怯えるような仕草をしたレンではあるが、安心

させるようににこにここと笑う。

ただそのレンに対して、ウォルトは気まずそうに視線を宙に泳がせた。

「あー、と。レンは今回お留守番で」

「なんで!？」

即座に問い返され、その勢いにややたじろぐ。ヨシユアに怒鳴られても平然としていたウォルトではあるが、レンの方には鬼気迫るものを感じ、思わず一步後退した。

「いや、俺とレンが一緒にいると目立つし」

指名手配されている謀反人が、黒翼の精霊を連れ歩いているのは有名な話。

セツトで歩いていては余計な争いに巻き込まれやすい。

「それでは私が……」

「ヨシユアには、他に頼みたいことがあるんだ」

そう先制されれば、ヨシユアには言葉を続けることができない。

「もう一度聞きます。罷だったらどうするのです?」

代わりに、頭一つ分以上も上にあるウォルトの顔をじつと睨む。

低く重い声での問いかけは、逃げを許さない。

「いや、その心配はないよ。アイゼリア領主なら、ね」

逃げを許さない、筈だったのだが。

いささか拍子抜けしたように、ヨシユアは目を瞬いた。

質問の答えになっていない。

思わずその根拠はと問い返すのを忘れるほどに、ウォルトの言葉は自信に満ちていた。

「なんでそんなこと言い切れるの?」

だから、代わりにその問いを発したのはレンの方であった。

ウォルトは口の端を吊り上げると、アイゼリア領主からの手紙をレンに見せた。

その手紙を最後まで読み、レンは目を丸くする。

「罨とかそういう手段に頼る奴じゃないよ、 ナリアス・ローズ
ウェルは」

26話 一通の手紙（後書き）

大変遅くなりました！

本当に申し訳ありません、毎回毎回予定よりずっと遅くなってしまい言い訳のしようもありません。

これからもゆつくりペースになりますが、確実に書いていきますのでお付き合いお願いします。

27話 氷雪の要塞

白一面の山の中を、ウォルトは歩いていった。

そこは晴天の下でなら、さぞ美しく光を反射するだろう。

しかし、このアイゼリアは冬には常時雲に覆われ雪が降り続けるのだ。

むき出しの頬を冷気が刺し、感覚を麻痺させてくる。それが気になり手で強く擦るが雪に濡れて冷えた手では気休めにもならなかった。

「ウォルト、卿」

背後から風に掻き消されそうな声が耳に届き、ウォルトは振り返った。

コートで着膨れした兵士が1人、雪に足をとられながら側に来る。レンもヨシユアも共にいないとなれば、他の誰かを連れて行かなければ、とヨシユアが選んだ兵である。

「アイゼリア城は、こんな、山の中に、あるんですか……？」

すっかり息を切らした兵士は、うんざりした様子で問いかける。

「山の中、というより、山に囲まれていると言ったほうが、正しいかな」

答えるウォルトの声も途切れがちである。

雪深い山を越えようとすれば、いかに体力がある人間でも平然と、とはいかない。

「帝都方面なら山を迂回する道があるけど、それ以外は山の中を通るしかない。これが北の要塞と呼ばれる所以だよ」

地理的に厳しい場所に位置し、攻め込むのに手間取れば即冬の猛威に襲われる。

北方守備の要。

この地が陥落するのは国の滅亡の時のみ、と言われている。

「それに、しても……こんな、山の中で夜が、更けたら……」

兵士の声には不安が色濃い。

リディア城を出立して2週間。

疲労が蓄積した中での雪山越え。

精神的にも限界が近いのだろう。

「大丈夫、今日中には到着する予定だよ」

安心させるべく笑いながら告げるが、疲労が猜疑心を刺激しているのだろう。兵士は疑わしそうな目でウォルトを見ていた。

「ウォルト卿は、アイゼリアに来たことがありで？」

「いや、来たことはないけど」

なら何故、と兵士が続けるより先にウォルトは進路を外れて崖に近付き、兵士に手招きをした。

恐る恐る近づく兵士に眼下を示してみせる。

「あそこに見えるのがアイゼリア城。そんなに時間はかからないはずだよ」

冷たい風の吹き上げてくる谷底に町並みが広がっている。

小さな点にしか見えない建物と少々離れて、遠目にも分かる装飾過多な建造物がそびえ立っていた。

「安全なルートを通ると目に見えるほど近くってわけにはいかないけど」

「ああいえ、目的地が分かって、気力が湧いてきました」

「それならよかった」

ウォルトは兵士に背を向け、元の進路に戻る。心の中でこっそり舌を出しながら。

目に見える、というのは確かにすぐ近くだと錯覚させる。事実、直線距離はこれ程までに近い。

その実、崖を下らずに山道を迂回した場合、それ程楽観視できる

距離ではないのだが。

「ま、今日中に着くには着くだろうし嘘はついてない」

「何か言いました？」

「いや、別に？」

結局アイゼリアに到着したのは、夜が雪山を包み始めた頃で、領主を訪ねるのは翌日に持ち越された。

北の要塞。

氷雪の町。

それらの呼び名からは想像もつかないほどに、アイゼリアという都市は華やかで活気付いている。

町のいたるところに掲げられたランプの中では、色とりどりの炎が踊る。揺らめきながらも決して絶えることなく、白銀の町を暖かく彩っていた。

雪の重みに耐える建物は堅牢だけでなく、町を飾りつけるのに一役買っている。

その代表ともいえるのが、アイゼリア城。

石造りの概観はそれだけで雪化粧と相まって風情をかもし出すが、町中と同様にランプの飾りが華やかさを加えている。

少々派手ではあるが、雪に閉ざされている町に活気をもたらすにはこれくらいで丁度いい。

もっとも、単に領主一族の趣味という可能性も否定しきれないが。

あつさりと許可された領主との面会。部屋へと向かう廊下で、ウォルトはそうにアイゼリア城の考察をしていた。

目的の部屋にたどり着き、案内人が声をかければすぐに扉が開く。初めに見えたのは、数人の兵士。そして。

「よく来たな」

開け放たれた扉の正面にいる、まだ若い男。部屋の奥に座している姿は優美と呼ぶにふさわしいだろう。

机に肘をついて座っている姿からは判断しづらいが、それでも肩や腕などからは細身の長身が見て取れる。

しかし、部屋に足を踏み入れ男に近づくと貴公子然としたなよやかさよりも、気の強さが勝つ鋭い瞳に射抜かれた。

いささか凶悪にも見える人相を前に進み出て、ウォルトは微笑んだ。

「我々に協力してくださるとの表明、大変有り難く思います、ローズウェル候」

恭しく頭を下げると、男の眉がぴくりと上がる。

「力ある国に迎合しない貴公の誠意、心強い限り、それがアイゼリアならばなおのこと」

丁寧なウォルトの口上を前に、男の瞳は徐々に不機嫌に細められていった。

「どうかお力添えのほど、よろしくお願いいたします」

「おい」

ウォルトの口上が終わるなり、男は低い声でウォルトを呼んだ。

「貴様、他に何か言うことはないか？」

「……なんのことでしょう？」

暫く首を傾げ、考え込む素振りを見せてから問い返す。すると、男は苛立たしさを隠そうともせず溜息をついた。

「……いや、なんでもない」

「ああ、それと」

苦々しげに吐き捨てるアイゼリア領主。

顔をそらした彼を見て、ウォルトはわざとらしく明るく声を出した。

「久しぶりだね、ナリアス」

名を呼ばれた途端その男、ナリアスは目を大きく見開いた。
にこにこ笑うウォルトの顔を凝視する。

穴があくほど見つめられ、ウォルトは再び首を傾げた。

「何？」

「……順番が間違っていないか？」

「お礼に来たのにいきなり馴れ馴れしい口きくのもどうかと思っ
たさ」

そうは言いながらも、ウォルトの笑顔はその口上がわざとであつたことを物語っていた。

頭痛をこらえるように、ナリアスがこめかみに手を当てる。

「俺がナリアスのこと忘れるわけじゃないじゃないか」

「貴様は相変わらずの性悪だな」

「失礼な。ナリアス見てるとなんとなくからかいたくなるだけだよ」

「失礼なのは貴様だ！」

ナリアスの拳が机を叩く。

重い音に、ウォルトの隣に立っていた兵士が身を竦めるが、当のウォルト、そしてナリアスに仕える兵たちは全く気にする様子がない。

机の悲鳴が収まり、際立った静寂にナリアスは平静を取り戻したように、深く息を吐いた。

「まあいい。貴様がそういう男だということは重々承知しているからな」

ナリアスは机に片手をつき、立ち上がった。

襟足の長い髪が微かに揺れる。

「もつとも、考えてみれば当然か。この俺を忘れる奴などこの世に
いる筈がないからな」

「いやー、ナリアスも相変わらずなようで何よりだよ」

自信たっぷりと言うナリアスに、ウォルトの口からは思わずといったように乾いた笑いが漏れた。

脱力感に肩を落とすが、すぐに旧友との邂逅の嬉しさが勝ったようだ。

少年のような明るい笑顔を浮かべている。

「卒業以来だから、もう5年も経つのか。時が過ぎるのは早いね」

「ああ、お互いに慌ただしかったからな。だが、せつかく久方ぶりに旧友と会えたのがこの状況とはな……」

ナリアスの声から色が失われる。

室内にいたアイゼリアの兵士たちが、ウォルトを取り囲み始める。

「残念な限りだ」

周囲から幾刃もの剣と槍が、ウォルトに突きつけられていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0130b/>

黒翼 ～ 精霊の物語 ～

2010年10月9日01時20分発行